淨 瑠 璃 評 判 記

演 劇 研 究 会 編

集

成

Я

例

一、本書は演劇研究会の共同調査による演劇資料の第五冊である。

一、前回の「浄瑠璃評判記集成 璃秘伝抄」其他に見られる評判の抜書、及び一枚刷り評判記を収めた。
 上」及び「浄瑠璃評判記集成 中」に引続き、今回は「素人浄瑠璃評判記」と、「浄瑠

その他は原本の丁付けに従った。

一、校訂の方針はできるだけ原本のままとした。ただし丁付けは「素人浄瑠璃評判記」と「義大夫執心録」は実丁数に、

一、本書の原稿作製および校正は主として、信多・土田・馬場・堀江・松平・森・祐田・横山・吉永が担当した。

一、本書の翻刻資料は、豊竹山城少掾・日比谷図書館・天図理書館より多大の便宜を与えられた。深く感謝する。

内	
容	
目	
次	

觧	義太夫執心録	音曲竹の響	江戸版 操 年 代	江戸版 净瑠璃秘伝抄	素人浄瑠璃評判記
:	:	:	記	伝抄	
	四二頁	三八頁	抜書 三五頁	抜書 三三頁	

素人淨瑠璃評判記

素人淨瑠理評判記

勉強素鑑序

堂のぬしこれが。批判のことがき。何くれと筆まめに。か しるし。元より四聲ほしひまゝにつかへど。 鄭衛の遺風もぎり。これを翫ばざるもなきは。実も芽出度」(1*) 御代ののひ。次第に繁昌して。いまや浪花のしげき蒼生。 あるかので、 より。催合て。口に糊する」(1~) たぐひにはあらで。それしろをおなじうし。わざをひとしうする。友かきの。 むつび たふとくおぼへしまゝ。此人この。 ほいをたつせんと亀耳 るて。このきよくか。わきて近曽より。此道のすき人。 むなく。長幼となく。能心を慰すにたるものは。 今の世にお 曲は。寛永のころよりはじまり。貞享宝永に。 大きにとゝべんきい できまうきうきい 大きにとっ 確は冨圧にあつく。楽は太平におこる。 それ浄瑠理の一れい きゃく /〜の。うぶすなの神~へ。手向けるは。 すしやうにも。

> に。 辞すべうもあらで楚洲なるもの阿波座の盧橘菴のみん を。 二(11*) たゞにしるしてよとのもとめ。 いなみがたさ なみの窓にかいつく

の若。このふたきざは、浄るりの父母のよふにし。習初にそ。はじめなり。景事は。むし」(ミシ) 尽し道行は。あいごぞ。はじめなり。景事は。むし」(ミシ) 尽し道行は。あいごる。當り浄留理は。国性爺。世話事は。 天満屋 お初より ぞしける。文藏は。三味線の聖也。染太夫は。 浄瑠理の虫 あた とくせくせい などよりぞ。 もはらなりけの南金。市物。先の順の中でなどよりぞ。 もはらなりけん はんきん いちぶっ にゅんじけん らざりける。たよりをもいれず。女をなびかし。 目の見え りとぞ。なれりける。はなてよぶ藝子。 みづにひく法師迄 さむるは是也。この音曲義太夫ぶしは。 大坂の初よりはや ぬこぜをも。ほとびさせ。たけき猛者共」(illt) の心をなぐ も。三味線さえ持ていれば。あしらわして。 いづれかかた しろふと浄瑠理は。元慰をたねとして。 万のくろとゆす

素人净瑠璃評判記

いあつめし。まきのいと口に。 かうおもひたち ぬる わけ

えたる綱太夫は。ふし」(四巻)事の上手也。聞人の耳を手摺夫が。下にたゝん事かたくなん有ける。近き世まで、 きこ夫が。下にたゝん事かたくなん有ける。近き世まで、 きこ也。染太夫は。文藏が。上にたゝん事かたく。 文藏は楽太

事いかず。いはゞはな哥で女を。ふづ」(ヨカンくるがごといる。いはゞはな哥で女を。ふづ」(ヨ東はよけれども。 地比太夫は。かつば筑前のながれ也。言葉はよけれども。 地虎屋饅頭の。 名代ばかりで。ちいそふなりたるがごとし。

の政太夫は。 前との政太夫と。一口にはいわれず。いはゞ

どりさへなくなりて。端居の簾もまれ!~に。 夜もしづかけたれど。ちやりとやらにて当りをとりぬ。いはゞ留主居会に。しかつべらしい負で。 はさみ将碁さゐていらるゝがことしとかや。春夏のあいだは。 つき~~しきなぐさみもかれど。ちやりとやらにて当りをとりぬ。いはゞ留主居各かれた。 ひとりとやらにて当りをとりぬ。いはゞ留主居各ががず。いはゞはな哥で女を。ふづ」(出ま)くる が ごと事かかず。いはゞはな哥で女を。ふづ」(出ま)くる が ごと

に。軒附なんど打むれ。こうろぎのしり声もほそき。 八重

まかせ。筆をとる」(メホ) ものは。亀耳堂のぬしになん有けむぐらしげる宿に。 いにしへをあをぎ・今をつ とふる に

る

丙午の秋」(ミヘク)

神様の掛人も千早振でな趣向の種がいりど ちはやなる しゅこう たね

大明六年丙午歳閏十月朔日・出雲の国大社・御客神・仕出しまか 大明六年丙午歳閏十月朔日・出雲の国大社・御客神・仕出しまか 大明六年丙午歳閏十月朔日・出雲の国大社・御客神・仕出しまか 大明が日本の神言」(モモ) ではずべしとの神言」(モモ) ではずべしとの神言」(モモ)

(七ゥ・八オは見開きの挿絵)

うりの身ぶりにて水波りのかるわざ。加茂は曲馬をはじめ給ふ。から、というではんと明てもくれてもあそびの一方。すわの明神は歯薬が、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。扨とず、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。扨とず、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。扨となり、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。扨となり、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。扨となり、松尾三輪の呑だをれ春日の肉食蟻通のいぶりものなど、。神達然ども。いなり殿は一統に、小豆飯。大黒殿は黒豆飯など、。神達然ども。いなり殿は一統に、小豆飯。大黒殿は黒豆飯など、。神達然とも。いなり殿は一統に、小豆飯。大黒殿は黒豆飯など、。神達然とも。いなり殿は一統に、小豆飯。大黒殿は黒豆飯など、。神達

よるなにいるなや たいら晩迄おたふくなれどチャリ舞の上手。たちから雄は記さいたい さいといった。 であったとしてめんみつに神妙そふな御 さいといった。 御亭主そさのをの尊は、元此国へ追出されて来て、則手 なづちのひとり娘をふづくつて、とをくへ仲人なしのぐずり込むと なり給ふ珠ゆへか、とかく此内は神等のよい内じやと雅言となくむかしから。 首懐へ、又神様といふ物は何事でも嘉例くへと、どこの のしかりき、扨く〜毎日のあそび事にほっとたいくつし給ひ、夜は ながしから、首懐へ、又神様といふ物は何事でも嘉例くへと、どこの 氏子の御ひいき、御霊は豆大にこつて御自慢被成るれば天神は、夜に ながしたら、首懐へ、又神様といふ物は何事でも嘉例くへと、どこの のかしから、首懐へ、又神様といふ物は何事でも嘉例くへと、どこの 大き、四方油のはなし、不圖寄進浄るりの沙汰になりければ、御銘と で、これたる事なれば黒人まさりの関功者」なっとたいくつし給ひ、夜は ながしたらしてみんと。次第に評判し給ふを聞しま、に筆をとり写し とはしうしてみんと。次第に評判し給ふを聞しま、に筆をとり写し とはしうしてみんと。次第に評判し給ふを聞しま、に筆をとり写し の御見くらべ。かならず亀耳堂が私の計ひで書たなど、。 恩召ます の御見くらべ。かならず亀耳堂が私の計ひで書たなど、。 恩召ます なん

天明六年丙午之冬」(元之)

凡がの

〇近比韶納赶奉納出勤の社中ばかりを評す素人方衡功者分も有れど

素人淨瑙瑙評判記

連社御加入無之方は是を省く

○天満はてんま船場はせんばと別とに是を許すかならず引合せ御覧

御無用

顔見世二の替の例にまかせ細蜜評判畳し申┡○此度初而評仕▶事故芸評至而細蜜には不仕▶重而寄進興行之節は○重而寄進御邑勤之方は追と加入仕細評いたし申▶

降内に表切より即意力紙と同った可載等3つ即方くよ客引即丸~○半時素納寄進に御崖勤無之外而も前~」(+₹)御尾勤之方又は寄進○書言 之わかちも是又故実により相定申卟事

ぶき申れ

省之甲ル尤居来不屈来は其日之任合夫而已評判任卟事」(+々)

▲上 町 之 部

大坂五社中素人净瑠理評判位定

頭

大上上吉

水

上上吉 (絵) ほうび 上 上 上 宣 宣 吉 上上吉

四

軒

弁

土

有

精

文

文

角

吉

安

楽

大

清

魚

カ

籴 土

花橋立木

浄 留 离 部

大上上吉 (絵) ほうび 上上書 上上電

味 線 之

三絃之部

み

そ

安

次 良

忠

大

大 佛 + 哥 庄

志

£ 1 2 1 2 1 3

上▶ 上町惣巻軸

島 之

部

泂 天 馬 淡 井 松 順 塚酢

۲

源源兵工デ平菊治喜

上 上 上 上 士

三 味 線 之 部

大

禹 小 俵 天 一 加

佐 羽 次 the number of the numbe

鳥 昌 弥

象 石 金 太 佐 亀 ff 徳 キ 平

五

河

进 进

上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 上上吉 土 上 上 上 土 土 土 土 土 土 土 土 圭 書 書

▲南 船 場

之 部

作 今 家 南 形 魚 大 文 菊 弁 木 河 津 喜。平 鬼 十 子 利 治 蝶 忠 藏 **H**:

上書 上上吉 功土上吉 位 下 上 上 宣 言

当時無出勤

之 部

満

突 巻 上 上 吉 至上上吉

= 味 線 之

部

哥 和 亀 政 源 加 錺 次 伊 至平 定 Щ 良 Ξ 扇 藏 造

盛 金 有

府皇山 平

一 山 馬 荒 三 柴 竹川里海生和大林大 藤紫源 喋喜 喋 小 又 治 山 伊夷山 水 清 哥 九

場 之

部

上上上上上上 上吉士上吉士 一書

味 線 之 部

豆

市

市左エ門

吉

枝 市

鬼文笠天 池 松 西 ŀ 文 閑 吉 宗 キ 葉 五 吉 嘉 利 庄 久 志 多 葉 佐 徳 林

上上上次签上 上度上 吉。吉。上度上 三

線 之 部

味

田 塚 八 天 大 正 平 林 松 津 餅 丸

へ大忠 宗 正八 平 又 叉 藏 八

上 上 上上

功上上吉

当時無出勤分

惣巻軸 至極上上吉

塚

五

八

し升ル

冠

治

大極上上吉

當時休

惣後見 同

南船場世話人

船場世話人

ゑ 平 な

進寄

素人淨瑠理へうばんき

中

(題簽)

+

上

町

社

中

天 田 長し 半

淀 治

百 傳

舞

興

(十九オ) |頭取||東西/〜此度御素人方・音曲の甲乙評判仕たふ存立ました

大上上吉

▲浄 瑠 理

之 部

水

てんまと別~の位附でござり升れば、位付を御引合なされて御覧被升。分而御断申升は兄例にも申ました通。船場はせん ば。天満 ははれい る所。各様早朝より御出席被下升る段・扨ノ〜悦ばしひ義てこざり 成升なへ | 大勢 | それは合点じやが頭取ゑこひいきすなよ | 頭取

堂嶋世話人 上町世話人

蘭

之

楽

桧

物

治

板

(十八夕)

俵

严

大

Ξ

▲一寸と御断申上升ル

松 鯉 主

徳

右両先生之了簡をかりなして三ヶ津惣素人浄留利評判近と差出

一(十九夕)

と、「できない」と思や「頭取」先此人はたぐひまれなる妙音の評判せいてどふしよと思や「頭取」先此人はたぐひまれなる妙音の評判にか、りましよ「ひいき」しれた事をぐずくへいふなイー木か妙音天誓ひに立まして。 みぢんもひいきは仕ませぬ扨先上町組からめられたできか

は行ませぬ [仙人] そふしやく、昔に世阿弥百首の内には行ませぬ [仙人] そふしやく、昔に世阿弥百首の内には行ませぬ [仙人] そふしやく、昔に世阿弥百首の内には行ませぬ [仙人] そふしやく、昔に世阿弥百首の内には行ませぬ [仙人] そふしやく、古いるが音曲なれば一概の論でちいるありとは語られんかの [頭取] 東西く、これも評判せいてどふしよと思や [頭取] 東西く、これも評判 所の にぎはひと挨拶するも古ひやつながら。まづく、おしづまり 下 さりませひと挨拶するも古ひやつながら。まづく、おしづまり 下 さりませひと挨拶するも古ひやつながら。まづく、おしづまり 下 さりませした。ふしは次へまはし声に節とうまみの有様にせられし 故 大 将 になれたものじや。こせく、と上手がる浄密理に大将はな い 先 此 人権大夫のうれいの聞かし と上手がる浄密理に大将はな い 先 此 人をれたものじや。こせ (と上手がる浄密理に大将はな い 先 此 人をれたものじや。こせ (と上手がる浄密理に大将はな い 先 此 人をれたものじや。こせ (と上手がる浄密理に大将はな い 先 此 人も。ふしは次へまはし声に節とうまみの有様にせられし 故 大 将 に もいまりとは語られんかの [頭取] 御無理とは申されませねど声を ちいそふ遺ふは追込をとひ又隅く で聞へるが音曲なれば一概の論でもいそふ遺ふは [仙人] そふしや (・昔に世阿弥百首の内に

「頭取」申く~それだけが臣来過升 どんなものじやヤイわるふぬかしたやつはどこにけつかるぞい此人の妙は語り陰すと世界が違ふて来る様に思われます「ひいぎ」れる事じやげな「頭取」なるほどく~其通じやげにござり升とかくれ。此歌をわるふ心得ると下手になり合点がゆくと名人の場へ至られ。此歌をわるふ心得ると下手になり合点がゆくと名人の場へ至られる事曲はたゞ大竹のごとくにてすぐにきよくて」CI 2ふしすくなか

上上吉

0

順四軒

(絵) ほうび

上上吉

からおつしやりませ元楽声はよし語もよふこさり升けれど全躰の気跡に出したこりやゑらひゑこひいきか有な「頭取一先/~評を聞て|頭取一御存옏の谷三丈でこざり台||ひいき||頭取なぜに一角より

升尤いなりの寄進より気持も大分よふなられまして上町連中のきを 分も七分もつよみとなりよいやなといわす所は大兵の一徳でござり を専らにせねばならぬてや「頭取」イャ又大場では塩町に似る故五 ひとなりました此通りでつゞいたら御出世は今の間く~ わるいぞや | 仙家 | 御尤じやが全躰浄るりの置所がわるい故太郎受 よいが塩町湯ばかり語らずと持まへの浄留理御出しなされ黒人請が の心遺ひ御察し被成い | 聞功者 | 夫はともあれけつかうな声で受も

上上吉

好

なり此かた段と受よく大分こたへ升御出情被成たら一派の立者には らしいやつがおります。頭取。ナア申わる口はこたへませぬ此人い てまそつと」(三大おやさすと語れやい」はさつ」もしいと様にくて ていまつた事かいな [ほさつ中] わたしらもこがれておりました 町娘連」なんじやャラあたじんきなどつともふさいぜん から大 わる口」エトさわく、やかましいこれびらく、といやな声をやめ

上上吉

今の間へ

慶

弁

留理の筋はよし何に申分はなけれども全小鍜治が老釼にてまさかの 所がかいなふて残念く る立者なれど何をいふても今少し小兵にて残念!~御修行はよし浄 頭取」鳴呼おしいかな此人楽屋受ほど向へきこへなばきつとした

素人净瑠璃評判記

上上曾

有

精

せ一大せい一いわるましよョイー上町一前かと南船場に出て有た人 |頭取 | 此度新四の有精丈でござり升いよく~ 御神妙に御聞被下ま

は」(回り大立者ともなられましよ)後家一しれた事合から大将様じ か | 頭取 | 其有精丈でござり升扱声はよし情は出ます末 く にて

上上吉

土

木

やわへ

年出勤なく又と此度出勤被成 [聞功者] 前とは大分いつた様に見へ るそや一頭取一仰の通りでござり升 頭取一此仁まへかどはあつはれ立者にも成そうに見へましたが近

上上宣

土

橋

ば大立者にはなれません程なく御出世でござりませふ出ぬけの小口 場ばかりでは達者とはいわれんぞや|頭取|乍然端場から取上ヶね へまはりましたすかさず御修行をこいねがひ升」(四々)

ぞやちやり場はきつと受ているぞ | 黒がり | ちと詰かたらしやれ端

頭取」此人近年御出情故上りました「大せい」花吉の俤が少し有

上上窗

花

、ゆき過ましたとの噂そこを御工風を被成で御出情し給へ 頭取」どふか浄留理の筋もよろしうござり升けれど気ばかりが先

ござりませふなる程今では声もおちる「わる口」麒麟も老て駑馬に

おとるじやな|頭取|いへ/~声はおちましても浄瑠璃が当世に合

たぞや「頭取」そふくはしう御聞分被下ましてこそ本人も嘸満足で

此人もまへは能声で鐘太夫はおいへで」(ヨホ)有たが近年はこへが茲

上上 御工風肝要く 頭取一随分御修行は足し様に見へ升がどふぞ向ふへ聞へるよふの 魚

力

上上

上上

頭取 | 御三人とも声はよし御出情次第御上達は今の間 / 〜」(四々) 上上

文

哥

味 線 之 部 清

評いたしませふ

いた所でござり升 しいき そふはかいな 頭取 御得心なら次を にくふ御座りましても元来鐘太夫丈の御仕込ゆへ風のあわぬが功の

楽

上上

大

文

大上上吉

(絵) ほうび

橋

上上

頭取

御両人とも御稽古嫌のよし二橋丈は能御声也何 卒 御 出 情

누

鮒

庄

行と練磨と年功であれ程の大勢がみな勘治郎連中となるもどこぞに音の」(ほう)さへぬところもござりませふが其音のわるひところも修

のれが何しつて先だまって有がたい評判を聞けやい【頭取】なる程

気取何にひとつ申分ござりませぬしわるローイャノー音がわるいま

ひいきーャア打ましよしやんく

頭取一扱此仁第一腕のつよさ 勘

次

良

だそのうへに引かたが気に入らぬしひいきし気にいるのいらぬとお

わざがなふて出来ませうか

上町

さいぜんわる口ぬかしたやつこ

ゝへ出されコリャ正宗も奈良物も研だところはわいらが目にはおな

大

忠

といふ事近比ない図な事じやこさりませぬ「ひいき」そうじやく そふす「頭取」くれく〜もあれ程の大会に뷯二郎一社中で一日勤る よけりや三味せん。ひかりや菖蒲刀でも。切るかと思ふてけつかるしよふに見ゆるけれどな切あぢのちがふ事は見へはせまいがな音が

大

仏

哥

頭取」おなしみの大忠丈で「船場」古つはものめが「浄るり好

功上上吉

上

上

巻軸

(絵)ほうび

上上吉

みそ安

|「頭取|| 左様てござり升谷三の九段目などは殊外こた へ まし た」|| || || || おまへはほそばちてし玉しやが又浄るりの方でも親玉じや

上上窗

吉

りを腹にとってしっかり〆て御引被成たらぐつと御出世〳〵一頭取 | 上つた〳〵しかしとかくばた〳〵と聞くるしいどふぞ浄る

上

角

几

頭取一随分御情出されませ上~吉は今の間く

巻軸

寳霽上上吉

鬼

「頭取」とふざいく〜御なじみの鬼声丈でござり升「惣髪の男」し「頭取」とふざいく〜御なじみの鬼声丈でござり升「惣髪の男」し「頭取」とふざいく〜御なじみの鬼声丈でござり升「惣髪の男」し「頭取」とふざいく一貫の名馬あれ共伯楽なしとは古人己を慷慨したる言葉惜いかな此人里の名馬あれ共伯楽なしとは古人己を慷慨したる言葉惜いかな此人里の名馬あれ共伯楽なしとは古人己を慷慨したる言葉惜いかな此人里の名馬あれ共伯楽なしとは古人己を慷慨したる言葉惜いかな此人里の名馬のれ共伯楽なしとは古人己を慷慨したる言葉惜いかな此人里の名馬のれ共伯楽なしとは「ない」という。

素人浄瑠璃評判記

なべっぱきゃらららのでは、からましています。くれています。くれています。 居らる、が新申は拙者が内証かならずく、大賢人に沙汰ばしし給ふ味が、まなく二度会稽山に概を上が人とのねむりを覚し給ひなば不懐も御まなく二度会稽山に概を上が人とのねむりを覚し給ひなば不懐も御まなく、一般のではりゃららんがんからました。

堂島社中

(大ま)

▲浄瑠璃之

至上上吉

松

|鳴之内||南船場は許せんのかな||頭取||申く~それは次第不同で||天満組||コリャ頭取てん満社中はどこへ出 そ と 思 て い る ぞ い

応な角力はとられませぬ「ひいき」ハテきつとした立者じやものどはなふて水かけろんと申もの此人年~~の修行の功ていつくでも相としめ身動きのなりにくひ語り様じや「頭取」それは御互に評判でとしめ身動きのなりにくひ語り様じや「頭取」それは御互に評判でじや~~第一けしからぬ妙音で折節は豆大をふるはす事が 有て やござり升扱是より堂嶋を評致ませう「ひいき」待ていた~~こちのござり升扱是より堂嶋を評致ませう「ひいき」待ていた~~こちの

上上吉

井

こにひとつ蓋のいれやふのない事じや「頭取」なる程左様く、」

治

介さ

前屋はどこに置ぞいのコリャ何か頭取こなん井筒屋とならんで居さ「備菊組」けたいじや!~みなおれに付てずつと出いャイこりや備

四

净瑠璃評判記集成

ゆへ爱へ出しました | 仙人 | なる程無理の尤じや | 頭取 | 此人は久 所なれども丼治丈は先古ふかたられまず故御年功でけいこも足りし 評は出来ません当時花方の備菊丈でござり升ればこゝに置んならぬ テどふじやへ | 頭取 | サアそふひとつ く ごつ く おつしやつては しう伝法屋の世話になられた故染太夫場はよふ呑込でい られ ます んすか | 頭取 | コレハめいわく先御しづまり被成ませ | 備菊組 | シ わる口一ナアニ吞込でも吐出しても聞へもせぬもの一頭取一サア

(絵) ほうび

それが玉に疵でござります

上上吉

備 菊

八夕

ひいき 一躰場所出ぬものと此人と一、口にいふのがいまくし

兵への小堀口久しいものしやぞャ | 頭取 | さればしろもの、すくな ちるくせ覚へが其証拠はしろ物がすくない故又しても!~おはつ徳 世間一ばいになり升一知り自慢」アノ世間の沙汰では三味線ちとか ではござりませんそれ故ちよつおつしやたわる口迄を書とめまして 日本国中へ弘り升るもの故いよく〜故実を糺し評致ますれ等閑の事 記は天竺震旦はいさしらずかくのごとく板行致ぜば南胆部州扶桑大てなどくから じやないか、頭取」申く、先頭取が評致してからおつしやれ此評判 いはよい先生がないから此人も廿年も前に出られましたら定てよい い先達て角丸の芝居の大当り何ぞといふと船場から頼にくるは此人

> 将末頼もしいは此人! やかましげもとれてあつはれ立著となられましょ何んでも若三の大 (九ウ・十オは見開きの寄進浄瑠璃の插絵)

上上曾

淡

平

た所があらわれます。しいき、よふ名は通ってたれでしつているぞ 頭取一左様でござり升とかくしにせでござり升 頭取|塩町の口中塩梅よろしく手づよい語り口が自然と年功のい

上上

馬

妾連 ポンニマア待もせんがまたんでもなし又面白い事かたつ聞

しやくと頭痛とがナ肩こしたさかい。針してもらはにやならぬわへかすといふてだましなャ【後家】イエく~わたしや急病で臍の下に「きょ」 扨此人段と評判よろしく

一大せい

一ハアイ頭取の酔どれめ。あほヨ が肩こして。けんべきかたこしたのよりは」(+クむつかしい用が有かた) これのざわ / ^ とやかしい評判のじやまになるがのてきは粋 ✓ │頭取 │ どなたも重而評いたしましよ いから内にじやないもの[頭取]どなたも評判のじやまになります

上上

酢

兵

れいの | 頭取 | 御尤じやがめりはりの有御気象マアやつて見るは御 頭取一とかく大きなばはそんでござりまず御気をつけられませい せわやき好 一随分声に逢た性に合ふたしろものを小短うやらしや

塩梅で是から段と上達して次第に功も行ましたらば」(元々)

立物になられましよにおしい事でござります仕出しは新ろじといふ

上上

塚 源

手でもないぞや「頭取」御意でござり升追付立者じやといわして御 を信仰と聞ましたが中~~八郎兵へ殿」(+ 1*)の 風 は 様 じやぞや 浄るり好一安土問答の四の切はきつとしたものじや是かゆけば下 頭取 | 近年づかく〜と御上達でこさり升 | 聞功者 | 今の染太夫

上上

目にかけましよう

源

順

浄留理を一頭取一イエノ〜なんでも太郎を悦ばすだけでも手取く〜 しい文句嬉しいぞや~~「わる口」なにをいふぞいけれんづくしの ひいき一待ていたく〜ちやりの名人殊に御作の地獄の噂はおそろ

上上

甚

人そろへは分而面白ふござりました」(+ 1~) つほど此人がよいじやないか | 頭取 | なる程声に面白みもあれど折 〈調子が上へつり上けておかしうなります | 上るり好 | しかし非 ひいき 順源とおなじ評は頭取あわてがまはつたぞやちやりはよ

上上

河

太

のきかぬが玉に疵しわる□一疵に玉じや一頭取しどふぞ御気を付ら ためきく〜と御上達被成ましたしかし生れついての間のわるい拍子 ひいき
| 今での花方祝ふてひとつ打ましやう | 頭取 | 三四年此か

素人浄瑠璃評判記

れませおしい事じや

上上

竹

清

儘ではいつ迄も益に立ぬぞや「頭取」イエ〈〜気儘ではござりませき、の出語り素人には手厚い芸じやとの沙汰でござります「聞功者」気「頭取」此人は八重太夫場が箱でござりますが神明の寄進に猿廻し

上上。

ん此人のは器量てこざり升

茨

平

頭取 三根太夫場を御語被成とはきつと」(+11*) 承りました随分

上上

御出情く

素人 頭取|御声はけつかうなり御出情次第随分大きな場がわたせます

牛

| 嶋太夫場はきつと受ています | 頭取 | いよく~ 御出情く~

上

上

加

天

佐

文は御声はよし御両人とも御上達をいのり升く 場より
| それで合点がいた其加徳のよふにたのみ升 | 頭取 | 天佐 場より一加徳を发らにおゐては済まい頭取是はどふじやイ 頭取 | ハア御前方被仰ます船場組の加徳其人ではござり ません

五

| 頭取 | 左様なれども末たのみ有立物仕出し御出世は今の間

上

亀

とひの

(十二)

<

上町ひいき 近比当座へ御出動と承りました祝いませうヨイ 頭取一左様でござり升備菊をうつされ末たのもしうござり升

上上

其外の衆は口の目録に入っました

巻軸

功上上吉

大

頭取」お待かねの大象丈でござります。しいき一待ていたく

打ませうしやん / ~ | わる口 | 楽屋をさわがすはきつゐ もの じゃ

わる口 | 何てもけれんしや上町の順四と計させいやい | 頭取 | 東 仙人」キの字を言かねらる、ゆへち太夫じやとの評判 じゃ ぞや

西 / 〜よいかげんにわる口も御取置被成ませわる口はこ た へ ま せ

ぬ当時是程岡又の骨随を得た筑前場かたりは 外 に ご ざり ま せん 南より一外にないとはどふじや木津忠は取売でなし本店から直じ

ござ」(+三*) り升又大象丈の物ぐさの三の切はきつい聞事でござり 升しひいきしたまから尤じやく やが一頭取一しかし木津忠丈はしばらく御引込故存た方がすくなふ

Ξ 味線之部

上上書

弥

吉

はよし別而鬼一丈の引かた有て面白ふござります。仙人」ちとしぶ 頭取」田舎出にはめつらしいしやみせん音はすこしかたけれど筋

象

かたきつる受てござり升

頭取」おとしばいと申うまひ事が聞へます其うへはなやかなる引

昌

藏

鳥

羽

小

(十三夕)

上

上上

頭取|鳥羽小丈はめき~~との御上達河左次丈は古いだけ文造流 河 佐. 次

の御引方くろしく 其外の衆は口の目録にのせました」(+四*)

南 船 場 社 中

▲浄 瑠 璃 之

部

功上上吉

木 津

忠

せス | ひいき | 御座らいでなんとせう久とていわゐませう しゃん 升 | 頭取 | 随分近比は二度大場ではなやかな御はたらきがござりま やと思ふたがやはりなしみの御人どふぞ打続御出勤被成たふねがひ はいやはや御自由な事てござり升[老人]どふやら聞たやふな声じ 頭取一此度久とにての出勤年功と申御声と申殊さら筑前のくり上

(絵) ほうび

上上吉

子

これがさつにいわあるな頭取殿かこみ込いわれた上での事いの こひいきしあがるやつはどいつもこいつもなぐりたやせし北の者 やぞけたいじやそ | 伝馬町] 頭取から引ずりおろしてなぐれく~ゑ り升しひいき」上と吉とはかりでは済まいがの。南浜。エラござし て大立物のなり立」(+四ヶ) お若ふは有末たのもしいとは此人で御座 頭取一当世の聞物弁子丈でござりますまづたくひまれなる美声に

頭取一イヤケ様に人こおつしやるのもおひいきのつよい故先これ

ばかり似てよい所は似ぬものでこさる此後はよい声な持まへの浄留 の様うふからでないと浄るりも上ヵらぬわいの似せる事はわるい所 似」(+mキ) せる事どふでもわるい同じ事でしんといめをするか第一 どぬける所か有ておしひ事じや其上塩町場か押ものじや がと かく す左様な位ははじめからないがましでござり升 [仙人] よい声なれ 作法ごござり升又中には位付けて後に取ても大事な位字もござりま あながちに位か付たと申て手柄にならぬも折には御座り升負つくで 付ますもござりますこれは一端付ました位はふたゝびとられませぬ ます上と吉と申は極官でござります其上に六品の位を置ます事故 から申事を御聞被成ませ評判も位付も大てい故実を糺しまして相極

> は此所に置ました _ ひいき _ そりやゑこひい きで はない かるの よし御功者にも御座りますれど今少し節があらふござり 升 先 今 年 ふしたはどふしたものじや頭取許を仕直せ / / 「頭取」なる程声も 上上書 ひいき」どふいふもので弁子より跡へ出した其上吉の字の下を白

上上書

文

鬼

_頭取」あれまだおつしやります重而評判でしれ升」(+¤ク)

よどふ見ても功のいた所は見へ升そ ますれはとこぞでは目のさめたやふなはなやかな当りがこざりまし りはりをつけてしつかりとやらしやれ。頭取。随分心かけていられ ります。わるロー跡へよらぬ気でも人か先へやらぬわい最一しめめ 頭取」いづくへ出ても跡へよらぬ気大勇者南の立物文鬼丈でござ

上上書

大 平

もェラウながいのが聞くるしい | 頭取 | これは御尤じやが全躰声は 上りめが見へた様でおてがらの程も承はらぬ今少気をはられませい 一風面白み有修行の」(+ホヘォ) たりし程見へまして末たのもしうござ |頭取||おなじく立者大平丈でござり升||仙人||久しいものじやが 頭取」イヱく、ヱラごわにこつていられますし仙人」コレこつて

り升

上上宣

理をおこり被成たらあつはれの大将にもおなり被成れ や ふ に なァ

頭取一御尤でござり去。ながら若ふは有声はよしなんでも南の立

魚

喜

素人浄瑠璃評判記

者といわして見せませう

七

一八

南蝶丈の」

羅

浄るり御出情次第御上達は今の間く]| 非力なよふでつよい所の有根もよし筋もよし先申分のない

上上曾

利

形

残念に存ますく しい事じや御出情の程いのり升一向あかねばこんなことは言ませぬ 頭取一大分評もよふござりましたがどふか近比はめいりましたお

上上

南 蝶

にぎやかにせねばなりませぬげな又加賀屋が大場の様な仕打したら 賀屋とい

を仕打の

行方で

致しませ

うけれ

ど何

をい

ふて

も

小兵

故芸

を (+<2) 爱にひとつのたとへがござり升貞山がマア弐寸脊が高ひと加 に御取廻し被成ふしこまかにめんみつ也御出情があらはれました」 頭取 | 殊勝なは此御人一躰が甚の悪声でござり升れとそこを利口

上上書

のり針

立者にはなられませんそこを御工風のたねにしていよく〜御出情い

ぞ最一度花やかな当りを待ます! 良にしたらよかろな【頭取】近比はきつるおよどけで御座り升どふ 上るり好」はじめからどふやら上手らしい立っりのよい仕出し女

上上

治

頭取 あたまから早合点かたり塩梅お声はちいさいけれど 伝法

(++*) 所で申ごとく御工風を御付被成ませ 作

屋仕出ししかし大きな場は御酙酌被成ませやくれく

上上雪

しれたふしにすかたんがお、いまそつと情出さしやれ[頭取] 頭取 | ずる / 〜と上りましたは此人ごござり升 | 聞功者 | 夫故か

し上へく〜を打こして声のかゝり升は此人まつたく是は師匠男徳斎 問くしひいき出たらめじやない達者があまるのじや の余光みす~~な出たらめぶしのないやうに被成たら御出世は今の

上上

+

てもかいなひは御自分の御様頭取も是のみ残念に存ますく 頭取|御情が出ます故御功者なかたり口でござり升けれど何を申

上上

頭取一第一声はよし師匠はよし年は若シ御隙もござるしよい事た

(十七ゥ)

らけ御出情次第に御上達は今の間く 其外の衆は口の目録にのせました

巻軸

金

平

ッもつよふござり升

一仙人

」エテは其たつしやなにまかせて出たろ ひいき | こちのじやく〜待ていた | 頭取 | 此人は元来声も達者根

まいの出たがるものじや御気をつけられい | 頭取 | なる程達者な人

先大将分人 の元祖哲~~人のなつくと申が備た徳の有故なれば何はともあれ先ふ一批中取立られましたは全此人の取究」(+凡*) すれば一方の社中 木津忠亀平など、大立者衆後にひかへといわれ升れど此南船場とい ん何と申ても功がいて御座り升大場でもよい手柄をいたされます尤 の語口は御素人方が其様に思召事もござり升れどそふでござりませ

 \equiv 味 線 之 部

至上上吉

錺 伊 \equiv

ましたらきつる御ひいきはつきますく 又出合を引てこれほどにあしらう人もござりません御なじみが出来 (+パタ) 一度言合せ致すと一撥もこける事のないと言ふ記憶のつよさ こか
関取

扨此人の芸は第一かんがつよふござり升ゆへたつた」 くはしい事を御しり被成ませぬ先一通り申ましよ | 大せい | それき た事でござり升また此人はそれ程御存御なしみがうすうござり升故 じやいの | 頭取 | されば素人にないと申のでござり升 | 北辺 | さい 又ござり升まい <a>⊥北邊」これ頭取ずは
<a>へとまたないとはとはどふ の其素人のひら又はへ「頭取」なる程平又丈は今さらいわでもしれ 頭取一先お音もよしお手筋もよし御功者なり此よふナ三味せんは

加

造

上上高

世なをりのした様に御仕上其はづは手筋もよし達者也随分御出情教 |頭取||さて近比は地震ではないがめき!~との御上達ゆつたりと

素人浄瑠璃評判記

成たら急度ふるわす程の御手柄かムリ升ふ

上上曾

源

次

郎

なされ升なへ 底にかうばしい所がござり升おとろへは橙のつかれなれど穴のすか||頭取||何ぼよつてもすどけたやうでも根が先の順四軒を引た手故 人は連中の錺りで」(+カホ) ごさり升南の御社中かんまへてそまつに ぬが妙寄進といふか何ぞといふと一番に身を入ての御世話こんな御

上上

政

蔵

判もこさりませぬちと御出動く 頭取|どふでも寄進御出動がうすい故御馴染がすくなひから御評

南惣巻軸

位不定

麁

平

頭取一どなたも御存知の人重而御出勤後評致升

淀

治

人

世 話

舞

八

百

伝

物 治 興

桧

(十九ク)

九

印刻取次物	表 紙 類	書本類	浄瑠理本	歌かるた類	草紙物	御経類	書物類	書
								壱 町 北 橋
部番点式るい 外の外	本綴なお	万 う つ し 物階書ひらかな物	六 行 以 き 本	清書 まき	往来物類	万年春	方かし本	青松堂村田氏

一(裏表紙内側広告)

養素人淨留里評判記 下(題簽)

天満社中

▲浄瑠璃之部

功上上吉

山

に」(1 きもなる事じやしかしまだ俤が残って有は此人かい「頭取」けないき」親玉~~今での岸本屋じやといふ評判でござり升のつししいき」、ままする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じや ない 岸りとゆきとゞきまする大鳥~~「わる口」イャ岸本屋じやといふ評判でござり升のつし「ひいき」親玉~~今での岸本屋じやといふ評判でござり升のつし「砂いき」

上上吉

左様でござり升とも何分天満の親玉く

和定

躰を崩さず行義な所が此人の味若これに当世が有ばきつと巻頭でごはど余り古風過てさみしい [頭取] 古風にはござれども上るりの本ひやし物ばかりくふている様な水くさ浄留理じや [浄るり好] なるした [ひいき] 親父さまく〜待ていました 急度 とくしん 致ました

ざり升

哥

扇

上上吉

でござり升しわるローなんじや」(こうしらぬが徳利は味そつめる様 頭取一横ぼりを捨銭屋を御心掛ヶは手くばりのよい被成やふ御尤

たにそさうはござりませぬ には聞づらい事もござれとも取ひろげたる大場でさへなければめつ にときく〜聞づらい事が有でほつとした「頭取」とうざいく〜たま

上上吉

九

大

やなぜ歌仙より評を下げたぞへ全躰鳥が違ふに頭取どふするのじや こなすが妙でござり升しひいき。自石の紺屋場はいらゐてはないぞ 頭取しいづれにまさりおとりもござらねども今では此人も遠方よ 頭取一さてく〜達者な人でござりますどんな場を語らしてもよふ

は世話場がよいゆへ何でも当世の気に合す上手者てござり升 つしやで折とは鍵をもって参られ升|大せい|たつしやなけれとも 一段下作なぞや | 頭取 | 下作なところも少] (11*)こさり升れどそれ

り帰られまして出勤もかけ升るはとかく足が達者な故又上るりもた

上上吉

林

哥

ふこさり升故立者にはつゐなられます にまそつとそろく〜かたらんせ「頭取」御尤でこさり升が立っがよ に上手がつた語り口うまひ事いゝたがり過てよふ声がつぶれるほど 頭取|御声はよし近年の出来ものでごさり升|聞功者|併めつた

素人浄瑠璃評判記

大

清

ひけいふじやがもふ底が入たそやもつと情出さんせ!~ 頭取|随分御声もよしとなたも御得心被成ます|上るり好|ふる

ヱ/〜近比大ふん上りめが見へましたぞへ」(Ile)

上上青

頭取」御好ゆへ殊の外に御上達此せつは御家のかつら事に寂か出

ましてしゆせうにきこへます此太夫場などはきつと受ております

上上

頭取|御声はよし浄るりはよう御こなし被成るし|聞功者

生

Ш

有れば申分はござりません から山のない上るりじやが御工風なされい | 頭取 | なる程是に山か

上上

海 老

伊

ませぬ ろ」(II*)がり塩梅殊に場所に御嫌ひなくまつたく天満仕立とは見へ をいふても鳥が小さふて屈かぬ~~「頭取」 其段は口をしけれどく 頭取一中く、よふ出来ますしひいきしるらいぞく 聞功者

上上

里

山

たものじや一聞功者一声ばかりろんせずとちと取しまりを御つけ被

ひいき

扨く

大きなうつくしい声じや黒人にやつたらきつとし

Ξ

んのなくさみといふ仕打御ゆだんく

成 頭取一何分妙音でござり升

上上

Ш 治

上上

馬

偨

るほど自身も御得心でござり升 |頭取||立引のつ、込塩梅きつしりとしたものでござり升 わる口しじなつき場は御免じやぬかみそもくさるわいし頭取

な

て御意得ませぬハアお留守そふなアゝ前かどはいきほひ よ ふ ます

頭取」どふでござり升な御替りも御座りませんかな久しう打たへ

上上

女中」わたしらはすきじやはへ「頭取」さればそれが出世のさま ひいき一うつくしい声に近比はたつじや」(言を)が見へます

たけでござります御ゆだん被成升なへ

上上

柴

小

竹

叉

上上

/〜御出世と存ましたがナ

山 源

みましたがとかくお声が掛りまして耳に立升るそ」(四2) 頭取一送りかへしからどふやら聞た様なこへじやとのうわさもや

藤

上上

上るり好一所によりてはやはりちやりが当るぞく 頭取」ずかく〜と歯にきぬきせぬいきごみ末たのもしう思われ升

其外の衆は口の目録へのせました

惵

上上。

頭取

はかまはれませぬしいなか侍しなる程ふしをかまはぬとはきこへた アノ此人は作方に心がけられ升故けいこの隙なければふしくらいに

いなか侍 コリャ上るりか中るりか下るりか 頭取 ヤサこれは 田舎侍」頭取チョツトあはふし頭取しなんの御用てござり升

至上上吉

夜

砞

巻軸

(絵) ほうび

めりはりが有て御功者にござり升きつと天満の大立者でござります には染太夫に修行し稽古めんみつに致されし故年功よりは浄留理に は初心より故人綱太夫皮肉に分ヶ人性根専らにして語られしが没後しいいき」待ていたく、打ましよしやんく、「頭取」東西く、此人

.| さして大鳥でも名人でもないにむしやうに立者にl(fit)し

頭取

一ころは親御にも勝らふと思ふたが中程からのたるみはほ

荒

喜

上上

お情がつきたやらとんとうけ給りませぬが今少し御出情く~」(四*)

| 組太夫ばのお心かけは此社中にてはおひとりなれど近比は

く名人の意を語られ升散いかなる大敵でも苦なし引受られしは角力 れ升は声はたのみにせす只浄留理の筋をたてけれまた気いさ、かな 仰升が聞た様でわかりませぬ全躰其かいなゐ声で立者になっていら お扣被成たらよかろふ | 頭取 | なるほどお心頭にかけられまして被 酒お上り被成げな夫ゆへ此せつお声もしか!~出ぬとの噂ちと酒を それゆへ大場では正根もきかず其上かいなゐこゑをしてめつたに御 て遺ふによつて気が高ふなつてめつたむしやうに黒がつたかたり様

弦 之 部

上上吉

市 左 工 門

ところもござり升れどしかし語り工合はうまいものでござり升親玉 るけれどくしやついた三味線じや | 頭取 | なるほど少しくしやつく ひいき」こちのじやく〜外には有まい一仙人一音もよし手もまは

上上宣

·左 蔵

さり升手に入と浄留理を上達さす事はきついものでござり升」(<<*) なしどふいふもので御こんぼうじやの | 頭取 | さればさあそこでこ がくや一待ておりましたく~一大せい一音じめもわるしきまりも

素人浄瑠璃評判記

上上。

つとよい道具はないかの [頭取] 成程道具ゑらみのない 所 は 残 念 頭取一御年配といゝ手の廻り塩梅きついもの! わる口もそ

喜

 \equiv

郎

土場

頭取」まへかたは手きはが見へました近比はどふか出来ませぬ随

勇

蔵

上上

定

次

郎

分御出情く

さまたどんな役受取ても酒の力でまさに卓然四延を驚すと毛唐人が、「天満連」酒で声がいたんでも又酒で大手柄の有といる肝のゑら

でいはゞ伊名川筥がしまといふべき所さすれば上手ではござららぬ

唐詩選にほめたは」(m2)此人の事じやぞやどふいふても大立者く~

頭取 | 手の廻り塩梅一流有引かた近比御上達御出情故と存ます

世 話 (六ク)

船 場 社 中

浄 瑠 璃 之 部

真上上吉

豆

大

治屋の位で御考へ被成ませ | わる口 | ろくに聞こへもせぬもの ら待ていたわいの一ひいき一位付が間違いわせんかや大極といかね ばならぬ所じやぞや | 頭取 | イャ此真の字を付ましたい わく は 字 大セイー親父さまく、ちいさの親父様おまへ壱人聞ふとて今朝

頭取一東西~~そこが評でこさり升ま

ひいき一つまみ出せく

左様(〜昔の浄るりは違ふたものてござる今素人上るりをよいのわた様(〜昔の浄るりは違ふたもので三大の位が下るやはり古風なといわれてほしい「老人」ものじやが声にもあはぬ」(キセン)古手屋八郎兵へや白石噺はやめてほものじやが増のきく事慥にしてうづらよし上手には有功はつむ耳をふ届くが妙押のきく事慥にしてうづらよし上手には有功はつむ耳をへとは声も少しおちましたが元来小ていなるこへなれども隅くへよへとは声も少しおちましたが元来小ていなるこへなれども隅くへよ

「頭取」 成程御尤てござり升がおまへ方はかりが聞て」((モシ)いればうと思ふてめつたに調子をひくうさつしやるが追込ます ぞや くく落が釘の折ぃのやうにぼく/~として耳に立ます其上に らくし やさが のかったは くりの聞かせよふが余りするどい 勿論 フシって何を出しても当よとおもはしやろが人にも耳がござる其上近年

何分長生させねばなりませぬー連托生の受でなければ立ませぬそこを行は功手のわさでござり升いまれんだくしゃう

至上上吉

福市

天場をかたる声なれど腹痔は染太夫の性根専らにしている所が見へちんまりとよい仕立でござり升 | 聞功者 | 此人の浄るりは元来組太|頭取 | 第一当世声にてつら (〜といやみなく二の音に面白み有て

頭取一当世の花方福市丈でござり升一ひいき一日本一のじやく

御尤じやがしろもの、すくないは名人達の古人になられた故て御ご下ばかりじや [わる口] 立者になっても代。物がすくない [頭取] 下ばかりじや [わる口] 立者になっても代。物がすくない [頭取] 特用の難有がたい事を御出し」 (R+)被訳い船場で大将になる人は足似せすに其儘じやどふでも太郎受のよい様にしたが能座敷杯ではお似せすに其儘じやどふでも太郎受のよい様にしたが能座敷杯ではおればれば大きな場を出してにいやりな事がござる気象の高い所は

上上吉

林

ざり升追、持合せをみがき立て出させましやう

致した其染太夫の俤が有声でいてたわいもないこと語らしやるは無義正しく本躰くずれず難有事ぞござつたが是も故人となり惜しい事

るいのと評判するは末世になりました中興染太夫が出てむかしの行

分別自身から評判をわるふするのじや [ませ] おれは豆大じやによ

鐘太夫場を語られて近比は色~と声にも合ぬものを出さし」≧をでした。 「仙人」 此人の何場でも語れるがいやじや前かとは専ら春太夫ばやかたるが船場の風でござり升しかし功は行達者には有 や はら かくかたるが船場の風でござり升しかし功は行達者には有 や はら かくかたるが船場の風でござり升しかしみは行達者には有 や はら かくかたるが船場の風でござり升しかしあんまり待もせんぞくん (人と) 「近いき」待ていた (一) あんまり待もせんぞくん (人と) 「ひいき」待ていた (一) あんまり待もせんぞくん (人と)

ないても下座へ下らぬ立物今はそろく~と自身のなぐさみに語りたへいても下座へ下らぬ立物今はそろく~と自身のなぐさみに語りた。

ひときは角力を取上ふと思ふてお気に入ものを語れたれとモゥどこるによつ評判がわるひ気持をかへたがよいわいの[頭取]なる程若

上上吉

加

徳

わるロー又吃かいのいやしやぞく~位付も過るわい「頭取」なる

ども声がかいなひ故ではかどりません程なふ正宗の名作打出され升乗がなふて淋しい /~ [頭取] 中 /~こらんでも御座りませんけれ乗がなふて淋しい /~ [頭取] 中 /~こらんでも御座りませんけれ乗がないたいかいない声で寒での角力しんどいめをしられます故かやうにいたいかいない声で寒でありません程なふ正宗の名作打出され升乗がないない。

上上吉

· 佐

「ひいき」とふした物じやぞいけたいじやぞく〜評付がわるひわいか。」といふ日本一の場を京迄覚へに行てどつこでも打わるじやないかまこひいき評判はならぬわいく〜「頭取」成程御尤なれども先にもお断を申ます通り加徳はふるうも有長く旧功致されました故斯いたしました「仙人」尤じや〜〜第一よい声をしていて無理やりに調たしました「仙人」尤じや〜〜第一よい声をしていて無理やりに調なしました「仙人」尤じや〜〜第一よい声をしていて無理やりに調なしました「仙人」尤じや〜〜第一よい声をしていて無理やりに調ないてや「ひいき」加徳ひいきのど仙人め引ずり出してどづけく、所が有其上覚へのわるひ」(元2)事はるいはないそれでふしに ずじがあるひわいをひくうしてはなりませぬもらひましたぞく〜評付がわるひわいんくわさしてはなりませぬもらひましたぞく〜

上上言

Ħ

閑

|頭取|| 是はどふしたもので御座り升大力無双の豪傑とんな大会で頭取|| 御存之閑多丈でご ざり 升 [わる口] どふなと せい やい

素人净瑶璃評判記

を関に心遺ひのない気味のよい人でござり升 [個人] それが何の益をあぶないわいの [頭取] されは唱はあたまからふし付てうたひ語なあぶないわいの [頭取] されは唱はあたまからふし付てうたひ語なははなしする事じやげな昔は義太夫もみなこんな」(すきもので御座りましたげな浄留里うたふといわずかたるといふから此人などはとうとと申さん [初る口] 時代の変化をしらぬは単元するといるからとはしているといるから此人などはとった。 (本人) それが何の益さん [素人] そんなら考くりが当世は上手かな [頭取] 温」故知ら新さん [素人] そんなら考くりが当世は上手かな [頭取] 温」故知ら新されるといる。 (本人) では、 (本人) では

上上曾

文

志

わる口一つたふのつたわんのと軽業では有まいし浄るりの事いへ頭取一新ゝ勤ゝ文志丈でござり升扱声はないが能ったわれ升

頼を案じる神明のときも初から不時が入た情出さんせ「頭取」それやい「仙人」イヤノ〜よふ語らるゝが何をいふても声が無念な末へ「おる口」〜たるの〜たれんのと軽考でに有すいし治る!の事しへ

上上宫

はなじみのないだけで御座り升

1.

(十*夕*)

(絵) ほうび

上上 净瑠璃評判記集成 下 西 庄 せ 二六

(絵) ほうび か し ¢,

五 土 拾 は

松

上上

利

上上。

文

藤

頭取」うづらよし仕出しもよけれども稽古がじだらくなと見へて

筋ぶしか多イおしい事でござり升御出情く

鬼

丰

上上骨

頭取」うつぼが生ていられたらよいに残念な事でござり升御情出

されませ」(ナーク)

上上

上上

嘉

池

上上

(絵) ほうび

か

l

¢

空

地

四拾五

は 附

いづれおとらぬ美声とちらも負ぬやうに御出情く

丸

吉

田

宗

馬

石

上上 頭取

頭取」はやうくろがりか付ていやなほどに随分取はなしてやり給

 $\hat{\langle}$

天

吉

上

八

伊

頭取一ちいさゐけれと筋もよし近比大分御上達情出し給へ

上

笠

Ŧ.

上上雪

頭取一立者のきさしがこざり升随分調子高ふ聞へるやうに被成ま

やうに被成たら御出世く

頭取一中くしよい声なり随分御出情被成てどふぞろうぜきのない

上上

か

L

¢

二階敷附

一(十二才)

四

十五

は

頭取

」お年は若し調子はよし鬼子に」(+ll+) ならぬやうに御出情

平

塚

⟨

上

田

八

丸

正

頭取」こまく〜よふ出来れとも我計能がらず取はなしてく〜

上

巻軸

頭取」近比お遠く〜敷が御無事なかな

其外の衆は口の目録にのせました

(絵) ほうび

大上上吉

でなければ聞かぬ様になりました一ひいき」第一ちやりのひんよく り」(+112) ばかり語らずとちと本間の浄留理も語れやい | 頭取 分も面白ふないぞ

一頭取

」それは大きな無理といふ物常の場とちや も此人でにぎはひ升 | わる口 | とかく本間の浄留理聞たがちやり半 急作の上手にてしやべる事に力みなく腹よれるほどのおかしさ船場 屈をはらさんため不図ちやりを語られましたが今ではとんとちやり 人全躰ちやり語りと申升でもこざりませぬが御霊の寄進に聞人の退 一人じや 女中 きかぬ内おかしうなるちやりなればよいがなァ 大せい
ちやりを出せ
一
外のものなら
鑓じやぞ
わる
口
ちや 頭取 | 御存知の耳鳥斎丈でござり升 | ひいき | 待ていたく おま 此

> こしらへる人は当時素人にはござりません修行の足りし所はちやりしらし 間にひろまりし現在鱗わらひ茸皆此人の作フシ付新上るりの一番もずんぎいうろ の」(+三*)中の地合で思ひやり給へ何んじや有ふと船場組の道具な

味 線 之 部 けねばならぬ大立者く

至上上吉

林

かぬ所が性根じやはなやか味はないけれど語りぐはひを凝ているお いふ節用集を失ふたもの故此人を子引にせにやなるまい元来当にい なければ聞はぬ訳は奥にくはしう申ます [仙人] 尤じやく~大吉と |平文組 | どふいふものでひら又をさし置て林八を巻頭にしたぞい 頭取しこれも師匠大吉殿故人となられし故今は船場の立者此人か

となしさきつゐものく
| 真実ひいき | ゑらひくしかしと段と跡

から追かけて来をるよつて由断はさつしやるなや」(+ハリッ)

上上吉

正

蔵

気持の能い所は外にないぞ立者く 坂其外在との大場での勲功を聞かぬかい「頭取」此人近年めきく **尤腕のよはひ生れつきなれど浄留甲語らす事は此人がかくべつよい** ござり升し黒がり」イャ三味線は語つて見ねばしれるものじやない 丈は当時の花方それ故おも/~と巻軸に出しました|<u>ひいき</u>|京大 と上達せられ最早誰がなふても急度間に合ますれど元来よわい所が |大せい| ひら又はどふするのじや | 頭取 | さればでござり升平又

りばの引くらべか成物か常の場がちやり程あたりめ有様にかたる人

は昔からござりません夫はなんにもしらぬ人の言事でござり升先世

净璃璃評判記集成

上上曾

大 平

でござり升れど遠方行度〜にして心持程手の廻らぬ所が」 (+g*) 據 なうござり升故先位も斯いたしました 頭取一此人場所をふみし大角力だけ音色も芝居くさくよみもこん

上上

天

叉

けられぬぞ一頭取 る | 仙人 | 此人我達者に任せ下手をなぶるが上手じやそれでは出ぬ 有てやわらかみの工風声にさわらず是に言合。がきけば大将でござ 頭取一扨へおしいは此人でござり升元来達者には有音は大吉の俤頭取一扨へおしいは此人でござり升元来達者には有音は大吉の俤 一しかし塚本屋の御引廻故追付上達く

上上

 \equiv

大

上

上

俵

頭取一大分上りました御出世の処が見へ升御出情くと

平

大極上上吉

花

(十四ヶ) 徳

板

御出情く に地取をなされ大分能御座り升板徳丈は筋がよいとの評判じや随分 お二人とも御一所に評致ましやう俵平丈は随分こけぬやう

世へて久しき御代とぞ祝しける

巻軸

(絵) ほうび

二八

平

叉

西に片寄らず高い調子ははなやかなりひくい所はよくならす先年よ る事もこさり升何分達者なは船場の風でも分て」(+エボ) 銘人のたね どれしひいき 何ぬかすぞいだまつて聞て居上らんと川へ やる ぜ 故末く〜はいらひてはござり升まい 合でまづ斯仕りました「坐敷もの」もそつと言合が利くとよいけ 白ふした | 頭取 | さればでござり升古ふ功をつむかつまぬかの気味 り素人に此くらいの三味線は承りませぬ[大せい]それに何で大を 頭取」とかく大会のせつ船場の浄るりの当るまじいも此人で打わ 頭取一扱もく〜驚入ましたは此人てござります生れ付音色よく東

船場社中 興隆会頭

至極上上吉

実

塚

五.

平

目出度惣巻軸とし猶幾久しう此道の尽ぬ常盤の谺にも岸の姫松いくは三尺の童子もこれを知るゆへ論ずるにおよはず花実相対の御両人は三尺の童子もこれを知るゆへ論ずるにおよはず花実相対の御両人側頭取』素人浄留理かやうにはんじやうせしは全御両人の功にて芸

榎 +

半

田

世

話

人

(十五ヶ) 長

天

 \equiv

0)

津

後 ケ

素

浄

瑠

聬

評

判

記

三

1111

来春早~

出

し申

r

御寶可

被下 御

n

京

花左油竹立茶天鬼木す熊漆和花南木道紅雛 地み ま ま 具 ツ

浄瑠理 人

カ

番

附

_

枚

摺

再

吟

京 右

戸 進

堺 浄

惣 瑠

許

仕 に

入

御 出

覧 勤

申 無

寄 江

理

御

之 n

方

扨

亦

右先日より出シ置申トの本郷御覧只今のあなを何となく書し書なり

御求御覧可被下小

暖たん

言が

小刻

H

男

文

不

調

法

記

近

刻

し (十六す)

二九

(十六ゥ・十七ォは見開き挿絵)

素人浄瑠璃評判記

石粋書をしんかうきに仕立早春より入御覧申い

真しん

腔が

人と

好ら

記き

小本一

冊

平門平虎庄蔵嘉公安八た喜 < た流平宗彦善

堺

連中

和鬼丁此士杉竹駒蘭赤京か塩さ入水花 ま し

文市字里佐山井矢陀た十 ま 武の左蝶王

連中

慶モ

棚 我 字 屋 ィ 竹 菅 為 三 八 吟 四 八 酒 軍 金 錦 是 モ根 ッ 百 百

田笑鳥八÷熊喜雀志熊海海万熊之吾流

売 茜 生 大 友 中 眼 大 梶 よ 川 紺 明 車 大 木 桝 縄 久 茜 し よ

キりまも記由光定八宗乙大石キ国し吉ッ米藤

] (+40)

鳴勢

巴 米 錦 生 錦 菅 志

八賀

つ

水 清 竜 子 車 六 广

出若て泉大平三川綿水此い中絹里舎大鹿染

毛 駒 柏 南 吉 民 烏 有 一 嶋 君 二 泉 菅 歌 八 サ 百 イ ト 石 宗 水 源 七 石 楽 宗 六 八 蝶 虎 紫 斗 熊 バ

絵中本千哥大八と紀こ芦大三か三鬼丁小灰木 百きんじす 新うせ吉一安平文平治笛五好せ咲千吾ぎ安平

三弦

野沢 喜八郎 大西 金二 野沢 喜八郎

右れん名次第不同に御座ト重而細評仕ト 亀耳堂 」(十八之) 目

作者

亀

耳

堂

印

太 竹

岩

\$. Л

ん

上総屋利兵衛 銭屋庄兵衛 田源兵衛 忠 助

大坂 江戸 京

林

増 舟

」 (奥付)

村田久左衛門

江戸版 淨瑠璃秘伝抄

拔書

● 対 本 家 太 夫

時なるかなく\去。天明元年十二月廿日よりふきや町あやつり座芝店なるかなく\去。天明元年十二月廿日よりふきや町あやつり座芝のな品でははしく当二月上旬よりも初日のよし家太夫どの、手がつあに古人となられしが今度家太夫殿も師の功におとらず芝居興行の芝居をこうぎやういたさる、事おてがらとぞんじまする是につけの芝居をこうぎやういたさる、事おてがらとぞんじまする是につけの芝居をこうぎやういたさる、事おてがらとぞんじまする是につけの芝居をこうぎやういたさる、事おてがらとぞんじまする是につけいされしが後に」(+==*) 丹後掾となりて肥前掾座へたちかへられしがされしいまする此人の師匠桝太どのも辰松八郎兵衛座元を暫く致いたされずなはち土佐少掾橘正勝座元家太夫といほりかんばん出さいたされずなはち土佐少掾橘正勝座元家太夫といほりかんばん出さいたされずなはち土佐少掾橘正勝座元家太夫といるのは、手がされぶしんにぎはしく当二月上旬よりあるが、まずる人へ吹屋町の新芝居新春の新上るり大あたり大はんじやうちよろく、吹屋町の新芝居新春の新上るり大あたり大はんじやうちよろく、吹屋町の新芝居新春の新上るり大あたり大はんじやうちよろく、吹屋町の新芝居新春の新上るり大あたり大はんじゃうなよりでは、大は、大きないでは、大きないと思いない。

· 豊竹八 重 太 夫

> 座にて致されすなはち三段めの切は住太夫との、かたられしが其時 其奴請状の上るりは御当」(+エホオ) 地にては四ヶ年いぜん豊竹肥前掾 がふだんいたされたであろふと思はれまするぞ見物大ぜいがいはく たりであつたそれゆへにお江戸中の見物しうもき、たいく~とつね 津はいふにおよばす四国西国おくおうしうまでもかくれのない大あ の口は此人の役場めつ永大ぜんのちやりはおよそ京大坂江戸三ヶの 店のわかい衆のいはく去ル安永五年三国無双奴請状の上るり四段め をしつほりとうけ給りたいとみなく~まちまするぞへ」(+四つ) 本町 りまする江戸の諸見物しうもよいく~とのひやうばんまづははつ春 江源氏九ツめ三味線野沢冨八とのさてもく~おもしろい 事でござ り鏡山古郷のにしきゑ九段目のおやくばことに目見へ出かたりは近 大ひやう」(+四*) ばん成しかまたく~このたび御下り則当春新上る のめみへめでたふ見物衆もうけとられまして珍重く〜是から九段め ても廿日あまりに四十両といふ文句をかたらぬものもなきほどなる の人く〜はもちろんの事酒屋のたるひろいまたははしく〜の遊里に されし梅川忠兵衛の大あたり大ひやうばんにてそのせつは夜あるき 日つゝがなく御出動大けい~~三ヶ年己前御当地にて出かたりいた ⟨〜まちにまつてのうはささぞさぞ上がたにいらる、内もくつさめ

本町四町目大植町 中山清七板

平竹 三和 太夫

(本) いふ蔵近立し程のはんじやういたせしとなり右豊竹越前掾は、若太夫享保三母、いたけ(を) かかったり、 (を) かん(な) では、 (を) かん(な) では、 (を) かん(な) では、 (を) がん(な) では、 (を) がん(を) がん(を)

当寛政八辰年九月十三日三十三回忌に相当る依て為追善法名こゝに

元祖豊竹越前少掾 八十四歲終言

一音院直覚隆信日重居士

明和元甲申年九月十三日

也あら名人のほまれは朽ずして末のく、迄も栄ふはゆたかなり豊あ 次に操歳代記を出板いたし夫に越肥師弟の伝をのべ称名にかへんとあやつりねんだいき

来、巳年宝曆十四年筑後一座御当地へ下られし評判明和二年大和掾 しはらの豊竹か音曲の名跡をとふものならんかし」(#三巻き)

座子十政太夫三十三回忌名古屋播磨太夫三十三回忌追善書あらわしき5005 は9ま 御当地へ下られし評判くわしく書あらわし御目にかけ申候

売出し申候間其節御求御覧可被下候以上 御目にかけ申候次に中昔名人素人浄るりひやうばん仕己,正月ヨリ

丙寛政八 辰九月吉日

本清 板」(世三終り)

注 ここまでは享保十二年版「今昔操年代記」をそのまま

流用し、これ以下を新しく増補している。

対 三 幅 うつくし 二ケ津浄瑠璃太夫 二弦人形方大評判 古 上手功者 大 時代世話事のしつかりうごかぬ時頼記 やはらかみも兼て聞所ある妹背山 音曲の親玉ひゞきわたる忠臣蔵 よい!~の評判は唐までひゞく国性爺 丈 夫 流 竹 豊竹 竹 本 本 住 麓 内 政 曲なったけ 匠 太 太 太 太 夫 夫 夫 夫 吉 出 抜 どれくも ひくからぬ音曲は富士見西行 江 うつくしいお声がやがて金の鶏 村町 見立浄瑠璃外題づくし 座列次第不同 太 太太太太 太 夫夫夫夫夫夫夫夫 春森橋八入倉弦千重半 頼 母 太 夫夫夫夫夫夫夫夫夫 夫

	すな			大			当			当					丈		実
	を			場			り			世					夫		躰
塩町の跡つぎくみてしる磯馴松	氏		古人の音曲をとり合せたついれの錦	越		おつつけ一座のどう見ても信仰記	. 弥		かたり口に伝授の多い菅原	綱	ふし事の花やかさはにぎはしい夏祭	釺		とつさりとした音声はひらかな盛衰記	頼	世話事は師のおもかげ引うつした忠臣	時
	太			太			太			太		太			太	講釈	太
	夫			夫			夫			夫		夫			夫		夫
			名人はだ					は. で			されか	<u>.</u>		真実		奇妙	
上手くの評判は四方にかほる蘭奢待	竹沢宗七	鶴 沢 五 八	鶴 沢 谷 八	籍 沢 伸 助	鶴 沢 伊 八	お三人共に揃ふて今での本てうし廿四考	野沢庄次郎	松雨斎	野沢吉兵衛	ひきたつるいさましさはいづれ文七	鶴 沢 晴 七	竹沢弥七	おとなしきばちの音はすぐな昔噺	野沢喜八	ねじめのうつくしさたれも聞に鬼一法眼	篇 沢 文 蔵	三味線之部
		塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 一 上手(~の評判は四方にかほる蘭奢待なを	塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 氏 太 夫 大 上手 く の許判は四方にかほる蘭奢待な を 氏 太 夫 大 天 大 ア 大 沢 宗 仏 を ア の許利は四方にかほる蘭奢待 ア 五 第 沢 五	塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 氏 太 夫 名人はだ 名人はだ 第 沢 ろ	塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 氏 太 夫 名人はだ 4 名人はだ 4 名人はだ 4 名人はだ 4 名人はだ 4 次 公	なを 古人の音曲をとり合せたつごれの錦 任 太 夫 名人はだ 6 沢 白 おとり合せたつごれの錦 名人はだ 6 沢 白 は 太 夫 名人はだ 6 沢 白	なを 上手くの評判は四方にかほる蘭奢待 おつつけ一座のどう見ても信仰記 おこ人共に揃ふて今での本てうし廿四考 おつつけ一座のどう見ても信仰記 名人はだ 名人はだ 鶴 沢 伊 保 沢 伊 沢 奈	なを 店人の音曲をとり合せたつぐれの錦 氏 太 夫 名人はだ お三人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 なを 店人の音曲をとり合せたつぐれの錦 氏 太 夫 名人はだ 編 沢 石 毎 沢 の許判は四方にかほる蘭奢待 お三人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 米 円 沢 石 なを 上手くの許判は四方にかほる蘭奢待 米 上手 上手 大 野 沢 上手	なを 指つつけ 座のどう見ても信仰記 数 太 夫 おこ人共に揃ふて今での本てうし廿四考 おつつけ 座のどう見ても信仰記 数 太 夫 名人はだ 第 沢 伊鶴 沢 伊鶴 沢 谷 名人はだ	なを 店人の音曲をとり合せたつぐれの錦 広 大 大 大 大 大 大 野 大	なを 点の分け一座のどう見ても信仰記 数 太 夫 は・で 本部へつけ一座のどう見ても信仰記 数 太 夫 は・で 本部三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 数 沢 声 矢 もた人の音曲をとり合せたつぐれの錦 武 夫 名人はだ 本部三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 野 沢 庄 次 なを 名人はだ 名人はだ 本部三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 駅 沢 台 場 沢 白 ス 台 本部三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 駅 沢 台 場 沢 台 ス 台 本部三人共に揃ふて今での本での本でうし廿四考 本 台 場 沢 台 ス 台 本 台 本 台	なを 塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 大 夫 と言くの評判は四方にかほる蘭奢待 なを 塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 大 夫 名人はだ お三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 野 沢 百 なを 塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 大 夫 名人はだ お三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 股 沢 中 なを 塩町の跡つぎくみてしる磯馴松 大 名人はだ 本三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 股 沢 中 なた 名人はだ 本三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 沢 中 田 沢 中 なた 本 名人はだ 本三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 沢 中 田 沢 中 なた 本 本 名人はだ 本三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 沢 中 田 沢 中 なた 本 本 本 名人はだ 本 本 日 田 沢 中	## 大 夫 は ・で ひきたつるいさましさはいづれ文七 世	## ##	やか とつさりとした音声はひらかな盛衰記 真 実 野 沢 喜 やか かたり口に伝授の多い菅原 本 夫 さはやか かたり口に伝授の多い菅原 は ・で かたり口に伝授の多い菅原 かたり口に伝授の多い菅原 は ・で かたつるいさましさはいづれ文七 野 沢 吉 兵 おつつけ1座のどう見ても信仰記 本 夫 名人はだ お三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 野 沢 吉 兵 な を 古人の音曲をとり合せたつぐれの錦 大 夫 名人はだ お三人共に揃ふて今での本てうし廿四考 野 沢 吉 兵 な を 本 夫 名人はだ 上手くの評判は四方にかほる間旁待 沢 荷 沢 奈	夫 とつさりとした音声はひらかな盛衰記 大 夫 ねじめのうつくしさたれも聞に鬼一法眼やかやかいたり口に伝授の多い菅原 婦 次 本となしきばちの音はすぐな菅噺 野 沢 店人の音曲をとり合せたついれの錦 本 大 大 本 本 本 本としきばちの音はすぐな菅噺 野 沢 古人の音曲をとり合せたついれの錦 本 大 大 本 本 本 本 本 本 本 大 野 沢 古人の音曲をとり合せたついれの錦 大 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 本 大 野 沢 古 本 <td>夫 世部事は師のおもかげ引うつした忠臣講釈 有 少 本とつさりとした音声はひらかな盛衰記 東 おとなしきばちの音はすぐな音噺 やか かたり口に伝授の多い菅原 本 夫 は・で おとなしきばちの音はすぐな音噺 竹、沢、弥弥かたり口に伝授の多い菅原 本 大 女きたつるいでましさはいづれ文七 野、沢 吉 兵 場 水の音曲をとり合せたつざれの錦 大 名人はだ おこ人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 野、沢 古 兵 なを 古人の音曲をとり合せたつざれの錦 大 名人はだ おこ人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 野、沢 西 孫 永 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田</td>	夫 世部事は師のおもかげ引うつした忠臣講釈 有 少 本とつさりとした音声はひらかな盛衰記 東 おとなしきばちの音はすぐな音噺 やか かたり口に伝授の多い菅原 本 夫 は・で おとなしきばちの音はすぐな音噺 竹、沢、弥弥かたり口に伝授の多い菅原 本 大 女きたつるいでましさはいづれ文七 野、沢 吉 兵 場 水の音曲をとり合せたつざれの錦 大 名人はだ おこ人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 野、沢 古 兵 なを 古人の音曲をとり合せたつざれの錦 大 名人はだ おこ人共に揃ぶて今での本てうし廿四考 野、沢 西 孫 永 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田 次 田

	手づよし	÷	段々		大将はだ		奇麗		仕立ばへ	すぐ		御出世	古風
けしからぬ御出世お声も花やかな千本桜		さつはりとしてあいのある振袖天神記		御しゆつせははやい恋飛脚		めつきりと御上達白も黒も悦ぶ碁太平記		やはらかみに花をもたせた苅萱		土地の気風をのみ込た勲功記	地事のうづらはどう見ても道風	てんほそのふし事をきつはりと猝もそう	
本桜	巴.	記	若		組.	伞 記	土佐		梶	芳			
	太		太		太		太		太	太		太	太
	夫		夫		夫		夫		夫	夫		夫	夫
												7	
		厙	l			2	当		名	妙			古軸
		质流					当虱	•	名人	妙手			古軸風
あぶなげのない遺ひかたまこと		流			やがて名人の部にこしごえ状	<u>Jī</u>	虱	・立やくおやま何にても当代の	人	手	人形之部	お座をお引は残多いかいおんだ	山
あぶなげのない遺ひかたまことに大		吉 T	吉田	豊 切		吉言	重 豊	・ 立やくおやま何にても当代の一ノ谷		手	形之	お座をお引は残多いかいぢん紅葉	日風
あぶなげのない遣ひかたまことに大汲入治	井	吉 田 岩 吉 田 岩	吉田礒	豊松弥		吉 田 氘	虱	・立やくおやま何にても当代の一ノ谷	人善吉田	お年はよつても遺ひやうは当世に大塔宮手 古 田	形之	お座をお引は残多いかいぢん紅葉	口 風 親 沢
入道	井庫	清洁田	吉田礒	松		吉田冠	重	・ 立やくおやま何にても当代の一ノ谷	人	手	形之		日風

寬政九己年初夏大新板

京寺町仏光寺上ル町

板元

吉野屋勘兵衛

									-		
	出		心ばへ		利		すつばり		おとなし		大
Vhr	情、	₽!	^	.≱_	口	دد	ŋ	1.33	し	<u>ـ</u> ـــــــــــــــــــــــــــــــــــ	出
次第にひやうばんは吉野桜	紋 太 夫	引はりのおこゑは矢口の渡	宮戸太夫	ちいさけれどうすみのある恋の緋桜	是太夫	お声ならふしなら当世の風俗太平記	礒 太 夫	ぼうやりとこせつかぬ所はおつとめのだんの浦	文字太夫	すつはりとしたかたり口師匠を其まゝ写絵姿	中太夫
				頭取	į L					手女夫	: 軸
	e	ia .		_l.			hhe			あづまの立者ちとお光りを松浦衣笠	
	5 E			土	•		竹			著ちら	
	竹	了		佐			本			こお光り	
	R	占					義			を松浦衣	1
	,	\t		少	•		太			P	ŕ
	ラ	ŧ		掾	•		夫	,		F	

義大夫執心録

拔書

道行	しのぶ売が本岡大夫	後に政大夫と蚊	二の切 竹本中大夫	下り	新浄留り古戦場鐘懸の松	已正月二日より	1	大夫元 元	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	是より左に記せしは見聞	古事 ながら後の人昔語にも 扨是迄は古老の物語 られし
f mgon 友大夫	七 平着的 伊勢大夫	ナ おかる 岡 大 夫	か 九大夫 折 大 夫	六段目 伊勢大夫	五段目 友 大 夫	四段目 紋 大 夫		仮名手本忠臣蔵	已ノ四月より	し事筆にあらはす覚書	成らんかと 記 し 置 也を我等幼年の時聞伝へ
	\$600 氏大夫	七見目 おかる 内匠大夫	殳	九天天 美代大夫		六段目 氏 大 夫	五たんめ 美代大夫	四段目 政 大 夫		忠 臣 蔵 津川大吉座	京都寺町和泉式部にて文化四卯十月

義大							未 ノ 年	+
人夫執心録	二段目		ş y	a .	未正月二日より			竹本伊
	竹本岡大夫		补 岁 這 原	そを				勢大夫座三ヶ
•	京 夏 祭 り				三段目	7	ひ う か な	四月
	どふぐや	きかろ	•	妻 乞	茶のミ			
	春	Ŧ		春	綱	i i	到	
	大	勢大	-	大	大	5	大	
	夫	ナ	÷ ;	夫	夫	5	た	
	一八幅太郎	3	佐大夫	友 大 夫	美名大夫	安達原	春大夫-	正月より 豊竹肥前
四三	中村仲蔵		須广大夫	出雲大夫	後		春大夫と岡太にゑらひめに出合	前掾座に而も

	四十七*とかぞゆる也京都 津川座にて九段	其後も相が					
	*とかぞゆる也津川座にて九段	も相かわらず中一日年中		中大夫	初下り		三の切
The state of the s	目大当り	ず 度々の大当りと也 文中大夫之時 江戸にて九段目		、源蔵腹切 大当り		糜	竹本紋大
	其の間の年数	4	,			兵衛	夫
	35X	化四卯年				大当り	
	筑	此			十段	九段	道
	前 は	大 夫			目	B	行
	しら	と 云			紋	中	両
	す	し	-		大	大	大
	語	中政			夫	夫	夫
	りし事	が鷹生					
	の 残	の夢		十 没		九 段	道
	る 山	ь Б		<u> </u>		E	行
	し な	十 年	内	中	ı	改	内
-			匠大	大		大	匠大
			夫	夫	:	夫	夫

一(十五才)

竹本音大夫	土佐座 諡 竹 本 伊勢大夫	^{宝曆十四} 操 芝 居 三 座		老女错手 吉田文一	女房鞠蔽 吉田文三切安倍貞任 吉田文三切	同 富	四段目 中竹本綱大夫口竹本紙大夫	竹沢勝次" 本 鷙 大
人	大歩第後大連東南弓部				た か の 大 の 大	かけ、頻り、	四段目 駄 六 網 大寒 小野道風青柳硯	十月 物 艸 相の山 春岡
出雲大夫	豊 竹 駒 大 夫	肥前掾座 新芝居とも 云	□ (十五岁)	江戸の花とは 出世なり 日々		一兴 \$ 4 御前 森田勘弥一投手御前 中村助五郎	一 安倍原在 中村助五郎一同英原公神社》 小佐川常世	TAILER TO TE TO THE TOTAL THE

四四四

浄 留 理 右 を 程 経 形 後 7 12 江戸 法 躰 せ 下りて専ら流行 7 净 語 雲 始

後に是も法躰して伴西といふ清水利兵衛古今の名人なり大坂にて今播磨といゝし

見台とて様々みどりの看板出し十日替り三十日之内三度取かへ未明 形道具等迄残らず下り正月二日より姫小松子の日遊初日より大入に (+七*) 室暦十四申年なれば当文化卯年迄五六十年なるらんが珍ら敷 されし斗也諸見物余りに群集する故気をうしなふ人も有らんと急に もなし末に至りて三根大夫文大夫両人かんたんのふし事を出語に致 にて飾り付道具一式あかりを照らし舞台一ばい押出し也見物皆々目 の種さて四月より新薄雪物語六月は千本桜」(+< タ) 暑中もいとはぬ より操芝居はじまって此よふな事は聞もおよばす是前代未聞の咄し さねば見物ならずとの評ばん棧敷割元に橘屋庄助と云人頼れしが昔 明て行見物は入処なく棧敷も土間も極めの外に金弐百疋も祝儀を遣 大入也其時分は年々新作の浄留理出る大夫三味線人形迄皆々名人数 を芝居もの一同にあふきたる事昔より聞も及ぬ咄しの 種 成 べ し」 案じ三尺四方も有ける大団扇を拵へ幕の間々に土間切落しの見物衆 より人の山をなしされども其頃正月より八月迄出語りといふは壱人 を驚かせしと也八月朔日より一座惣名残り浄留理として名月名残の 大入にて七月中頃より狐場出大切吉野花櫓忠信と覚範の人形を燈籠 て諸見物未明より挑燈にて入込後は内木戸の奥へ〆切を拵中く~夜 扨右名前之通中の芝居は筑後掾一座大西藤蔵引請にて大夫三弦人

世直しヵヶ〈 〈

看板出る其図左に記す
一 明和二酉年四月大坂より竹本大和椽野澤喜八郎同道にて下り一 明和二酉年四月大坂より竹本大和椽野澤喜八郎同道にて下り一 明和二酉年四月大坂より竹本大和椽野澤喜八郎同道にて下り一

多有けるゆへ諸国共に義大夫節大流行也近来の立もの塩町政大夫石

如ク

内紺じようを差神社工上る額の 七八寸位生地磨出し文字彫りの 看板堅木にて長サ五尺斗横はゞ

江戸中専ら評判取了~也出し物左にしるす」(+ハヘク)

御目見浄璃理(ママ)

富士見西二 香爐場

ひらかな 無間鐘

清和源氏 山伏せつたいの段 竹本大和掾

門人

野沢喜八 夫 夫

三弦

中てこなさんはい、かしらぬがおらアねつから くへのはて迄もどんな上手な大夫じゃと旦那さんがた芸者衆多くの 右大和掾看板めづらしきとて其評判江戸町々はいふニ及 ズ 津々 浦

しばらくく一此評判も

跡にてくわしく此所預りく

□ (十九才)

角力に取組御覧に入候

義大夫執心録

凡三十年余り下り大夫衆中を 室暦十一旦年より寛政のはじめ迄

四七

同後年	同	同	同	同藤	Ē	1	前頭	小結	関脇
\$P\$ *** *** *** *** *** *** *** *** ***	志賀大夫	大	中大夫	大		۲		千賀大夫	錦大夫
同時大夫	同で撃事大夫	* 「女大 利介錦大		同 内匠大夫	利介絹	同 筆大夫	次兵へ	前頭 竹本綱 大夫	×
同 常大夫	同に定大	司 同	同	同 倉大夫	同 佐賀大夫	同 三根大夫	同 河内大夫	前頭 竹本国大夫	
同与	同同	同 金兵へ家 大 夫	同此村中外大	同	同同	司 同	同喜代大夫	八 同 長門大夫	
同 沢大夫	同 婆大夫		· 布大		同千代大夫		司 4 。 同大夫	同難波大夫	

四九

一(十九夕)

	至而器用之部	复	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	原长 色子大成类 中大	双兵へ 岡大夫			之部	右は 三段目 語り	文 蔵 住 大 夫	藤兵へ 紋 大 夫	小鳴三 十七大夫	後に寿楽 伊勢大夫	後に丹後 舛 大 夫	東鏡錐大夫	ぎこは 政大夫
かつらの部	松之介 河内大夫	1	く ちくこ坐 三根大夫	人 人四郎 内匠大夫人			古手や 君 大 夫	利介越大夫	平兵へ 八重大夫	# 1	少音之部	人 和 介 音大夫	へ 原左衛門 麓 大 夫	人 与兵へ 春 大 夫	人 類 4 なし 駒 大 夫	人 うりん 大和擦
手取の部	此村や 紋大夫	あふらゃ 筆大夫	声よしの部	京/理介 錦 大 夫	康左衛門 駒 大 夫	天清氏大夫	後に若大夫 和佐大夫	理介絹大夫	ベッメ 加賀大夫	功者部	蘭者待 組 大 夫	源藏桐大夫	源 藏 志賀大夫	佐吉此大夫	幸 介 千賀大夫	爺 武 錦 犬 夫
たいくつ組	±1610廉七 袖 大 夫	大	大	出 雲 大 夫	事知り之部	後に村大夫 八義大夫	兵 介 友大夫	かこば高弟 土佐大夫	たっしゃ之部	先に加大夫 崎 大 夫	+ 大郎 時大夫	吉兵~ 三輪大夫	後に重大夫 鷲 大 夫	かんしゃく 祖和大夫	四郎兵へ 文字大夫	菊 大 夫
之割判人	i よ	角力取組之			けれん組	一本 鄉 越後大夫	いせた 佐賀大	長門大	藤兵へ 倉 大ツコ	忠三郎 佐渡大夫	庶二郎 百合大夫		(S/4) - 5/4	第40 第40 第40 第40 第40 第40 第40 第40 第40 第40	ひらか 綱 大 夫	□ E E E E E E E E E E E E E E E E E E E

高名之大夫衆中を町~~評判の聞書

一 其項義大夫の日本一と聞えし大和掾事第一器用なる人にて筆を背鳴大夫の弟子也程なく大和名残にて上方へのほられし孔子も時り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も特り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和の門人と成られし孔子も時り素人の先生といゝし恐主氏は此時に大和後事第一器用なる人にて筆を背鳴大夫の弟子也程なく大和名残にて上方へのほられし孔子も時に合ず

の場で与惣兵へ定之進に逢ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふのの場で与惣兵へ定之進に逢ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふの大手柄挑蹙多く有中に丸に木爪の紋所が一番沢山に有たは〇印をもつかふにのせて仕切場へ持込とのけんとく也孔明をやられし西の大手柄挑蹙多く有中に丸に木爪の紋所が一番沢山に有たは〇印をもつかふにのせて仕切場へ持込とのけんとく也孔明をやられし西の大手柄挑蹙多く有中に丸に木爪の紋所が一番沢山に有たは〇印をさいなかりし也程なく八月よりは惣名残赤松の祈の場で山伏の見の場で与惣兵へ定之進に逢ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふの場で与惣兵へ定之進に逢ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふのの場で与惣兵へ定之進に逢ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふの場で与惣兵へ定之進に進ふて縁とはあいやけどしの其矢声向ふのの場で与惣兵へ定之進に入事が、としているが、大手は、大手を入事である。

いふ事は政大夫と藤蔵から始りしか物しりに聞べし」(コ+1々)は住大夫之役場となり住大夫大出来也三味線は大西藤蔵鬼に鉄棒と二月中比病気之節姫小の赦免状をば弟子住大夫に譲りと成夫より後と酒を呑すぞへと即席しやれも銭もふけこんな芝居が唐にもあろかと酒を呑すぞへと即席しやれも銭もふけこんな芝居が唐にもあろか茶屋迄聞えしゆへ茶屋の女房客人にあれ政大夫場 *▽お早ふおそい茶屋で関えしゆへ茶屋の女房客人にあれ政大夫場 *▽お早ふおそい

先下さるべしと申切られ此気性斗でも誠に無類の稀ものく、 を下られしが三度ながら大当り其中でも時頼記の三ノ切信仰記三ノ で下られしが三度ながら大当り其中でも時頼記の三ノ切信仰記三ノ でこ迄も頓着なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とこ迄も頓着なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とこ迄も頓着なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とこ迄も頓着なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とことも明着なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とことも観音なし其上にドスがき、無類の妙音声の一ばんは駒大夫 とことも明治の三ノ切泉式部の三ノ切其外数多有べし三味線は鶴 では存候へども我等之浄瑠理は芝居座元へ売切置候御昼順の を仕合には存候へども我等之浄瑠理は芝居座元へ売切置を御昼順の を付合には存候へども我等之浄瑠理は芝居座元へ売切置を御昼順を割して、 の方様方は何卒く、」(コナロま) では、一、脚大夫元は伊勢海道之人やらん越前様の弟子也段々評判よろ

其次がひらかなの妻乞ふ大経師の玉が宿名 残 が 鉢 の 木 一 方 の 」一 鐘大夫肥前座へ下り目見江が東鑑の元服夫より桜 丸 はら 切

義大夫執

心録

浄瑠璃 新判記集成 下

(三十三) 大将なれども老年ゆへ評判薄く残念く

判宜敷時三味線引両三人名残り狂言時賴記雪のだん此評 判 大 て い芝居へ下らる、と看板斗出しが結城座にて先代萩新浄るり出来て評の帯屋あしやの子別れ物狂ひ菊酒屋も評ばんよろしく三度目は中の一 大和掾門人幸助千賀大夫是も都台三度下られし其中にも桂川

座での大達もの~~ ばんよく後に丹後掾と受領して舛の一字を芝のお伝へ譲らる、肥前ばんよく後に丹後掾と受領して舛の一字を芝のお伝へ譲らる、肥前一 舛大夫是は肥前座の大黒柱いつでも三の切がお定り益~~評

て」(□+□+) 随分誉人も沢山なれど何をいふも小音にてさして許も一 ざこば高弟土佐大夫浄留理一道におゐては古今の 事 知り に

る度ひどくあてられては屋根や左官の大当り其頃のはやり歌にし其後下りが妹背山子供も知った大当り駒大夫春大夫両人の様に来水の出花でぞつとさせ又書置では目をはらさせ女中見物は積をおこ本の出花でぞつとさせ又書置では目をはらさせ女中見物は積をおこれの出花でぞつとさせ又書置では目をはらさせ女中見物は積をおことに道風の四段目掛合にて役割は前書之通舞台の上迄人の山アレが残に道風の四段目掛合にて役割は前書之通舞台の上迄人の山アレが残に道風の四段目掛合にて役割は前書之通舞台のはやり歌に入る度に対している。

はだふく〜と大当りく〜流して聞も有り久作と母親の意見の泪と見物のよろこび泪で切落し也扨またお染の質見世高いもひくいも皆一よふに嬉しがりよだれを也扨またお染の質見世高いもひくいも皆一よふに嬉しがりよだれを春大夫を見物が与兵衞大明神さまとほめしが此大明神などの誉始り春さん駒さん中の芝居さんおかげでぬけた土佐」(コエヨッ)

らそっとするといふは此両人の浄留り也後世思ひ出しまする/、夫にて両人とも評判よく語らる、内に二三度づつ見物がちりけ元かられ近国より四国九州迄も修行し又大坂へ帰り幸ひと東座へ世話れられ近国より四国九州迄も修行し又大坂へ帰り幸ひと東座へ世話れられ近国より四国九州迄も修行し又大坂へ帰り幸ひと東座へ世話れられ近国より四国九州迄も修行し又大坂へ帰り幸ひと東座へ世話れて、天にて両人とも評判よく語らる、内に二三度づつ見物があり、一次に、大阪の小関物屋成しが浄留り執心にて末一、此大夫は左吉とて大坂の小関物屋成しが浄留り執心にて末

年迄も許ばん有り九十余歳と聞へし珍重イ〜」GI+四2 大と成是も弟子成しが古人となる然るに師匠友大夫事長寿せられ近く古人と成られ又塩留の船宿にて村田屋藤兵へといふ人後にかな大れても不評なる事なし此人の弟子に鑓屋町辺に狩野大夫も評ばんよ座にて忠臣蔵九だんめ中大夫と掛合由良之介役大当り其外何を語ら座にて忠臣蔵九だんめ中大夫と掛合由良之介役大当り其外何を語ら座にて忠臣蔵九だんめ中大夫と掛合由良之介役大当り其外何を語ら

にて向ふが百合大夫也竹に雀と両場ながら大当り染大夫口惜しくおけれたが一一、染大夫事大坂伝法の住人にて木綿商内などせられて此大夫として向ふが百合大夫也竹に雀と両場ながら大当り染大夫の神の芝居にて筑後一座惣中下りて古今大入之時也其時染大夫役は姫中の芝居にて筑後一座惣中下りて古今大入之時也其時染大夫役は姫中の芝居にて筑後一座惣中下りて古今大入之時也其時染大夫役は姫中の芝居にて筑後一座惣中下り大路に大塔宮ノ陣大鼓恋女房の十段目に小ノまた火場千本の四の中名残は大塔宮ノ陣大鼓恋女房の十段目に小ノまた火場千本の四の中名残は大塔宮ノ陣大鼓恋女房の十段目に小ノまた火場である。 本で、いかいがいかいが、から大当り染大夫口惜しくおりとの評判其時の」に1+4+2) 中の芝居にて筑後で、出動其節小野道風始て出 中の芝居にて筑後で、出動其節小野道風始て出 中の芝居にて流後で、出動其節小野道風始て出 中の芝居にて流後で、出動其節小野道風始て出 中の芝居にて流後で、出動其節小野道風始て出 中の芝居にて流後で、出動する大きり発大夫が といとの評判其時の」に1+4+2) 中の芝居にて流後で、出動する大きの発して流を 中の芝居にて流後で、出動する大きの外に野は大きと 中の芝居にて流後で、出動する大きり発大夫が といとの評判其時の」に1+4+2 中の芝居にて流後で、出動する大きり、1000年では、1000年で、1 おかる 和佐大夫 緋の麻の葉鹿の子の上下小袖にた 大 夫 崎 大 夫 柿の上下に大崎之小袖先にからたし 大 夫 塔 大 夫 菖蒲草の上下にて布子も同断

也」(三十六十)

勝手な事を城木屋~~最初下りよりは十三年め也其時之評判にわしやいぬから跡で何なと最初下りよりは十三年め也其時之評判にわしやいぬから跡で何なと右いづれも立派なり尤評判大てい也染大夫事是が三度目の下りにて由 良 介 筆 大 夫 黒羽二重の小袖羽織にて

一 岡大夫 ヌ チ 郷 と云諸人岡又 く ~と云也此人くり上ヶの上手に

義大夫執心録

1 たごてで比して少折でしたことでであっていっていったりに台上行古人と或られしと聞サテ気の、毒ヶ紋太めとも評判大てい銀座弐町目の東側に居られし也明ヶ午の夏芝居仙めとも評判大でい銀座弐町目の東側に居られしの切忠臣蔵にて四段め十段

き内登らる、とはおしい~~ (I+++) 十七大夫と云也江戸ェ下り蛭小嶋の三ノ切其外の評判もな一 十七大夫此人大妙音にて十七才にて三ノ切をかたれしより」

た何はとも有れ中古の稀人浄留理の花が散たよふじゃぞ今一度聞たには少しは不許も有物也近来江戸の大稀もの高麗屋の親父でも老年し政大夫実の弟播广屋治兵衛と申人」(コナスオ)備前岡山栄町にて生土間の見物を見積るが此人の得手物是年功と業の叶ひし余りと申せ土間の見物を見積るが此人の得手物是年功と業の叶ひし余りと申せ土間の見物を見積るが此人の得手物是年功と業の叶ひし余りと申せ土間の見物を見積るが此人の得手物是年功と業の叶ひし余りと申せ土間の見物を見積るが此人の得手物と年功と業の叶ひし余りと申せ土間の見物を見積るが此人の得手物とはいいない。

一 此道にて老年迄芝居へ出勤せられし分袰にしるす

い親父さんく

越前少掾 友大夫 住大夫 重大夫越前少掾 春大夫 無町政大夫 麓大夫

ひし所役もめが出来しやら半度に登られしはおしい~~る」(コートペ) 語り口声がらよろしく素人請殊の外宜敷末頼母敷おも一 美名大夫下られし時相生源氏三段目許判よく第一きよ ふな

将と呼ぶ人でも有ふが是が麓なれは重畳迄も余程間が 有 ふ 早 く」くらべては三ノ切語りはどふでも住大夫麓は四の切物だ大切では大だが浄るりの語り口笛を吹よふだと悪評也其次*さまく~と取替出えるゝといへども評判わるく住大夫のよふに生根があればよいが聞きるゝといへども評判わるく住大夫のよふに生根があればよいが聞きるゝといへども評判わるく住大夫のよふに生根があればよいが聞いた。といへども評判わるく住大夫のように、一 麓大夫先に下られし時は和田合戦二の切評判よく其後下りは一 麓大夫先に下られし時は和田合戦二の切評判よく其後下りは

(ニニ+カ*) 登るがよかろふ五月切く

性のごとく大ようなり石町の親玉く 度御召被遊有がたき仕合也と自身も不断咄されし浄るり語り口も気 御断申上候と今子も其儘帰しけると其時稽古に居合しれん中物語や めござ候へ共御府内にて芝居の外御座敷は格別寄世場浄るり決して 有て千万祝至私身に取て面目に候得ども是迄も度々外様より御すゝ(耄) 理に頼度と前金持参 = 市達て相頼けれは住大夫申けるは大暑之砌 熊 野澤八兵へ人形は文吾藤九郎大入也寛政元酉年大坂より度々状通に 和半バに下られ矢口新浄留り三四とも大当り次が糸桜の 四 ツめ か 中の芝居へ大坂筑後一座残らず其時姫小松三ノ四千本桜渡海屋と評 々御出被下候段」(mi+*)いか斗有がたしと種々馳走を出し御贔屓と 三段目大当り其夏休之内牛込辺の茶屋両人来りて芝居休中寄せ浄留 て登られ出動間もなく病気にて久々相休み程なく江戸へ下り紅梅館 十三年目也江戸土産旧錦絵と名題の看板かゝみ山七ツ目大坂に近来 ゞ見山七ツめ花上野志渡寺忠臣蔵四段目」(11+10) つゞれの土手場 巻の手掛で泪をふかせ酒買でおじやったかの詞は諸見物一同に感心 ばんよし姫小のばらく~は政大夫の代役大当りすぐに本役と成其後 大夫大手柄なり同五ピ年に江戸中の芝居へ下られ小栗の毒酒三味線 めづらしき大入其次が矢口渡益!~大当り今にも抜本にて御存じ牛 いづれも評判よく扨又天明三の頃大坂筑後座再興に付住大夫上坂が 〈〜三度目が薄雪の鍜冶屋場鶴澤文蔵の三味線にて大当り 其後 明 一座名残之十日替り冨士見身売場袖をしほらせ長吉殺しの憂ひで鉢 体気性大よふにてこせ付ず御大家様がた御贔屓破遊芝居休中は毎 生大夫 田中文蔵 とて住吉之丸屋が親元也宝暦十四 申,春堺町

一 志賀大夫 🌉 是も筑後一座にて下られ姫小松序切其後名残之

性爺紅流し大出来/〜おすわの身替りも大当り其後京都にて木津忠 も持病有て度々不動也其後十七八年振にて又く、結城座へ下られ国 躰此志賀大夫は上手名人の有中でも浄留りの虫と迄云れし人なれど の此志賀大夫も持病がなくば適の大将ならんおし日事く くぬし彦福市水長など、数多あれど追込んでは医者殿でもこまりも おすわを語られしか塩町によく移りました大坂には素人で上手が多 也其時之二ノ切麓大夫四ノ切駒大夫也其後川中嶋三ノ切よろしく一 節出勤なければ跡に残り肥前掾座にて和田合戦三ノ切」(EI+2) 大入

豆腐にしてほしいと見物か望むも尤いづれ其頃は音大夫斗にも限ら ず二の切から上ノ大夫は皆夫くへに妙か有たと申也 が降よふだ茶屋の男に手あぶりを持て来い帰りは鮟鱇の味噌ずか湯 ざしらず是迄も名高ひ大夫も語られしが音大夫のは別段で今にも雪 ツ目大当り扨また格別之出来は時頼記の雪は昔の先生に越前掾はい 次ギか妹背のあづまからげと云新浄るり其後亀山染之」(E+1*) 八 音大夫 粉 室暦十二 ケ 春下り那須の与市三ノ切評判よく其

るい

桐大夫信仰記の迷ひ子感心組大夫蘭奢待の三妹背山向ふ床許

此三人の大夫評判も宜しかりしが馴染贔屓もなき内帰られし 家大夫東からげ中之巻評判よし錦大夫と改名直に登らる、

綱大夫ひら嘉とて手取の業物近江源氏新浄留りの時染大夫」

茶吞~~ともてはやすひら嘉はじめし霊地とかや あんな茶呑"が宇治にも有かと打寄と年寄衆中が茶吞咄し綱大夫の (II+1º) と威勢あらそひ役もめも有しと承る扨下られしは宝暦十三 * | 春安達原四ノ中其外色々の中にてひらかなの三ノ中は格別よく

義

大夫執心録

じらひぢきのないは御贔屓御連中様がた何ぼ伊勢子正直と申迚も此 申ひらきの出来るまでお江戸を例の矢声しておいらん国へ隠居く おはらひがなかりしと」(川十二十)聞しが伊勢の大夫におはらひとく ら大方一万度ぐらひで有ふか其年二月六日の類焼に大夫其外一同に 読声時鳥の八千八声伊勢大夫の矢声は毎度とも数がしれず伊勢だか 大当り夫より直に座元となられ時に取ての大鳥物也時と鳥と重ねる 君大夫下り明和半べ亀山染八ツ目語られしが四五日立と登ら 伊勢大夫寿楽昔下られしは寛延三四の頃春芝居布引滝三の切

と庄蔵と心通ぜしか芝口初台といふ木茶屋へ吉兵へ三輪太を口語に 大当り其前に鳴大夫と改名間もなく若大夫と成てさて此幾竹やは何 切小田館七ツ目次が八百屋の献立其後先代萩御殿三味線床次郎にて りぶしにてサワリを江戸風に語られ第一声がらよろしく弓勢のニノ 和佐大夫の特別を成り、別和之末下られ三勝の書置おそのゝ出をハ

₹4億 先生とは縁者と云当時音声大丈夫なり」(ミニナ=リオン) 三四と両 場 いづれあやめと杜若其内にも若大夫と申名が東座での親玉株しかも と待て居る天満屋はどふで エス 〈 枣酉〈 天満此村幾竹油屋此四人は そんな事はよせと云やしたサアく~夫よりはこちの紋太はどふじや 輩と云夫に付ても住大夫宮戸の両人斗寄世といふは出られなんだが 手引を頼み迚もの事気を揉療治の看板を出し名題はかた気打寄人の 数多出来操座の大けんぴき大夫の代りに按摩へ抱へ三味線の代りに へ出らる、と云事昔よりなかりし此幾竹屋が始り也其後より寄せ場 して夜分出動せられしが」(ハロトニロヘ) 始ッ芝居で二の切位之大夫が寄世 /〜イャ/〜油屋をなぜ出さぬ但しは結びに出す気かしやれて居ず

浄瑠璃評判記集成 下

て遺ひでが御座り升 サァイ、跡はイーレッタゥットャンマ を指し給はば四人の中での親玉尾張俵と同じ事入 が 有動られてもいたむ 気 遺 ひ がなしきれへでうれいもよく きく 也っ

ろしく尾張へ下られしが彼地にて屋張此世の名古屋にておしき紋太も評判よかりし其後結城座にては」(wifflet) 女護島二の切も至極よ近名題看板が五度替りしと云さて其次が累の土橋花上野品川いづれ匠と下り伊大夫なれとも紋大にひしぎ付ケられて春より 五 月 節 句匠と下り伊大夫なれとも紋大にひしぎ付ケられて春より 五 月 節 句匠と下の異見迄近来稀成大評判其時之隣芝居は大夫揃ひ住筆氏内から惣六の異見迄近来稀成大評判其時之隣芝居は大夫揃ひ住筆氏内がら三代目安永七度ノ春肥前座へ一 紋大夫 此むらきな兵。上総掾から三代目安永七度ノ春肥前座へ

平右衛門先生の通り外にまねする人はなし其次伊達競七ツ目大鳥村や無類の三幅対扨また迎駕籠で小梅のうら声ソリヤマアなぜにやははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレわしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはわたしも〈ヘアレカしもとどや〈〜出る其姿ははぐれたか、さまはおいたが高野山近年稀成大神りし換芝居の大当り春太のお縫と筆大夫お駒此氏大夫の御山は古中無類の三幅対扨また迎駕籠で小梅のうら声ソリヤマアなぜにやはずりし換芝居の大当り外にまねする人はなし其次伊達競七ツ目大鳥村中に大夫の運り外にまなする人はなし其次伊達競七ツ目大鳥村中に大夫で演奏者が、高いは大きない。

成しが其五月是も古人と或おしい!~などは常躰の評也名残が蘭奢待四段め二度目の下りがかしく新屋敷

檀へ油屋をついで外の事は岩附町た、手を合せて佐助たまへく らば操芝居も繁昌すべしと噂も手向の心ざし枯たる木にも花川戸累 の花くらべとても他国に真似も成まじ今でも油屋のよふな出物があ 年今のかゞ屋歌右衛門大坂登り賤別も近来めづらしき事実やお江戸 黄金の山の大会成し所々に花会有しかども油屋程のはなかりし也前 も無類の大当り其後筆大夫花会之節は昔より見聞もせざりし集り高 線は喜八友次郎など、稀人のより合此お駒は油屋壱人和佐大夫有と 下りが同四年*の春染大夫と一所に中の芝居IT下り」(II+EI) 源七 てどふしてァッ世へッッ・聞へませぬ」(III+mo) こふなはれくへ仏 **く〜の大入は昔小石川ないかひなひいきれん中芝居迄小糸いふたと** 名古屋帯伊達くらべの羽生村ひよく塚花川戸塩飽七嶋三の口いづれ し紙数十五枚を壱匁宛に売出し銭設けせしと其後は本町育小石川の 云かし本や床本をかりて其夜の内に写し夫を」(m+n*) 早束抜本と 聾の事をも才三さん叉お駒染お駒飴抜キ本の出来ぬ内に中山佐七と およばず近国在々浦く〜迄ソリャ聞へませぬが流行して其時分には いへども一向にさたもなくそこでも爱でも才三さんと江戸中は申に 致せしとあれと其比は作者は近松門左衛門大夫は受領の名人達三味 るり出筆大夫城木屋にて中の芝居の大入は矢口此かたの評ばん明々 **丈は五月切に登り其跡八月頃迄休み漸々と八月中頃恋娘昔八丈新浄** だかおつに引ばる大夫だと許する間もなふ登られましたが二度目の **サフ 五月迄年を越しての大当りなり其昔国性爺時頼記など三年越に** 筆大夫 神屋を今安永二 見年下り亀山染九ツ目評判よし其時は何

筆はなくとも爪先*を筆の替り一生の内是は筆かし 弘法も筆のあやまり筆大夫

是は親駒大夫に留まりし

中 丈 才 ‡o 村 座ニ而此狂言大当り也 友右衞門 五郎 之 丞 城木屋庄兵へ **止兵へ女房 六郎右衛門** 金 作 蔵

其後七段目のかけ合平右衛門評判よろしく 一 絹大夫 द्यू 明和七年に下られ矢口渡二の切と四の中大出来で

下り博多小女郎評判よく其後名残に動にて現在鱗鐘入を名残として登られけるが又寛政七ヵ年土佐座へ妹背山にて万才と山の本床大出来にて夫より」(ミナスキ) 肥前座へ出野道風法輪場三味線野澤藤三郎にて評判よく其次本町育屋敷のだん町 内匠大夫《四郎安永五年 申,春中之芝居へ下られ目見江に小一

智 * 住 大 夫 ……*** / 一 一 一 まずん 清 七 三曲掛合 あど 内匠大夫 大 タきり 重 忠 政 大 夫 近年2 外に名残として 内匠大夫

義 大 夫 執 心 録 八重大夫 平兵へ安永九 子 幸中の芝居へ下り恋飛脚新口むら

のよい人夫といふも平兵への心掛がよいから~~ながら拍子の能時に下り合せて八重にもふけて登られ八重~~仕合をがら拍子の能時に下り合せて八重にもふけて登られ八重~~仕台に来は二度ながら塩河岸なり勿論此時住大夫か、見山大当り」(『十六》)流行しました此名白石では紋大夫場五ツ目七ツめ是又大当り其後天流行しました此名白石では紋大夫場五ツ目七ツめ是又大当り其後天

越大夫 羅々 安永の末に下られ差たる料理あんばいもなかりし

なたに山本と申てよい茶屋がァ、コレしやれずと贔屓の富、床ぼたいなたに山本と申てよい茶屋がァ、コレやれずと贔屓の富、床ぼだい大りはでつちの長吉が三吉に馬追させ高野山へ尋て行といふあんば次旬はでつちの長吉が三吉に馬追させ高野山へ尋て行といふあんば次旬はでであの長吉が三吉に馬追させ高野山へ尋て行といふあんば次目して其後ゑな十下られて理介主の暮し方に恐れ入しと也鳴門の大りはでである。 大きに山本と申してい茶屋がァ、コレーやれずと贔屓の富、床ぼたいなたに山本と申したしやアノナ京都から来て駿河丁に此頃滞留してするがことの東側はでである。 大きに山本と申てよい茶屋がァ、コレーやれずと贔屓の富、床ぼたいなたに山本と申てよい茶屋がァ、コレーをおり、大野はん夫から段々が自じて、大野はん夫から段々がはいい。

田大当り~~ 田大当り~~ 保お静に成され升きて百合大夫 富量度成率 染大夫殿と同道に一 先お静に成され升きて百合たけ合向ふ床評判よく竹に雀の語りて肥前座へ始て下られ染大夫とかけ合向ふ床評判よく竹に雀の語りて 光お静に成され升きて百合大夫 富量度成率 染大夫殿と同道に

先*へ唱て下されとふじやく

- 後ちよぼで出語をせられしはこりやもしどふでアリンス国唐の錦かれ両方とも大当り男ふりと行義のよさ古手物より京織之錦しかし其(Ξ+ハック)下られ目見江が時賴記雪のだん君太の古手屋と引張て語分一 錦大夫 利← 是は三代目京織錦なり寛政四∓ 年中の 芝居 へ」
- たゞよふ船のごとく山がみへぬ!)よわ物の追込中間聞人あくびまじぐらで笑われもせず泣もせす冲によわ物の追込中間聞人あくびまじぐらで笑われもせず泣もせす冲に 出雲大夫友大夫両人喜大夫袖大夫四人とも古兵なれども気が

しらねども京がさめたく

一 ニホル君大夫駒犬夫と同道で肥前座へ下られ人もしらぬ大夫じ

- りも乗越して君太贔屓は嬉しがりょ、君太く、もの堀出し物と江戸中で近来稀成許判にてJantak)中頃は駒太よっとおもふし所三味線は八兵衛で古手屋の大当り古着之中から渡り
- けて定めしよろ昆布屋~~の門松質見世の段大出来にて三味線は藤三郎当座之内しつかりもふの門松質見世の段大出来にて三味線は藤三郎当座之内しつかりもふー 時大夫+★#是は寛政のはじめ二度目の下り肥前座にて妹背
- 隅田川三の切請よろしくどふした事やら夫切に不勤也(一一 菊大夫肥前座にてひらかな勘当場大出来国大夫中之芝居にて)
- かよう 一 須广大夫いつも肥前で評判よく伊佐大夫もひぜん!~と評ば
- 京ては帰りを松之助江戸出生の娘をは京へのぼして古郷と江戸とのに扇屋をひらひて柳屋になびき柳よく~直ぐ成柳屋の主じとなられの見物嬉しがり素人請の大評判其後累物語七ツめクリ上ケ岡又はだの見物嬉しがり素人請の大評判其後累物語七ツめクリ上ケ岡又はだの見物嬉しがり素人請の大評判其後累物語七ツめクリ上ケ岡又はだの見物嬉しがり素人請の大評判其後累物語七ツめクリ上ケ岡又はだい。 一 川内大夫 高松屋&とめ 京の糸店もすて、浄留り執心にて西国エー 川内大夫 高松屋&とめ 京の糸店もすて、浄留り執心にて西国エ
- 三さん ノ口其外評ばん大てい~~どふでも雪国越後のはて佐渡寒かろふ忠浄留り艶姿縁切大出来~~其後花樓の八ツ目に」(gl+*) 由良の湊三一 佐渡大夫 # 三 # 千賀大夫之世話にて中の芝居が初舞台目見へ

縁を組糸やく

佐賀大夫とて肥前座へ出勤其前は山下町新道にて芳大夫とて

た三の切は大丈夫と見物楽しみ居る内に古人とはおしい了、 の御師の仮宿多き古内町辺へ年居を定られ弟子教多取られけるが其の御師の仮宿多き古内町辺へ年居を定られ弟子教多取られけるが外のとの許判の御師の仮宿多き古内町辺へ年居を定られ弟子教多取られけるが東の御師の仮宿多き古内町辺へ年居を定られ弟子教多取られけるが其本田座へちよほに出られ其後佐賀大夫と改叉伊勢大夫と名乗り伊勢 森田座へちよほに出られ其後佐賀大夫と改叉伊勢大夫と名乗り伊勢

- 一 驚大夫w≒へ主皙十三年春大夫司道にて下り七大夫と或りマー 三根大夫かんたんの評判よし崎大夫鎌倉山のちやり評よし
- 譲らる、筑地の原鉄は此人の弟子也」(四+1+) 重大夫と改名此人宗玄の庵室は評よし七大夫名をかつら師十次郎へ 鷲大夫 ホールギヘ 室暦十三年春大夫同道にて下り七大夫と成り又
- 何はともあれ古狸鷲太祖和太は兵物/~郎程ではなし先代萩にてあてられし若大夫は元祖和太が弟じゃげなを始メ所々へ住居をかへるがくせなりなれども市次郎が弟子の喜太達者成事妙也去ながら門弟と度々あらそひし事夫故に京橋大根がし 祖和大夫是は大疳癪持ゆへ角力へは入れずといへども浄瑠理
- 夫」(四+19)本郷辺也此人けれんいつわりなし結城座妹背山之折筆一 三代の長門大夫 左宮 せひらがな笹引大てい其後も評なし越後大

難波でひらく大当りは

義大夫執心録

左の両人之衆は角力取組になき江戸の花か大夫の代役酒屋を語られし其功によって煲に記す

事は珍重/~しかし住大夫に成ての寄せは不出来也事は珍重/~しかし住大夫に成ての寄せは不出来也のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし見へが鬼一のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし見へが鬼一のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし見へが鬼一のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし見へが鬼一のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし見へが鬼一のニュ切敷座元も堀出し物と悦び夫より日増に評判よし

登るよふな物大坂には親父達が沢山あればたとへあたまを播广わさを領土書す)軽々敷成ふ事なら政大夫などははるか前方にもならるへしてまます)軽々敷成ふ事なら政大夫などははるか前方にもならるへしてます)軽々敷成ふ事なら政大夫などははるか前方にもならるへしてます)軽々敷成ふ事なら政大夫などははるか前方にもならるへしているの人に関大を平人に聞すに何之受領が入べきか誠に麓をさし置撃へはがざるゆへ烏帽子将東にて御庭上に手を突て無本にて景事を語り相成ざるゆへ烏帽子将東なら政大策と江戸で受領の看板出しが大坂では一 サデ 土佐大夫播磨の大掾と江戸で受領の看板出しが大坂では 玉川の水でさらして難波津の監に楽なす江戸ッ子紋がた

れても大掾なひからおとなしくしてござれどふしても土佐節のほふ

が聞がよし当時の親玉く

一 音曲と申内にも義大夫節は元大坂の生立なれは音声此国の上 といふ事もなし近年の宮戸大夫芝桝おでんこれらは江戸の稀物也内 といふ事もなし近年の宮戸大夫芝桝おでんこれらは江戸の稀物也内 といふ事もなし近年の宮戸大夫芝桝おでんこれらは江戸の稀物也内 匠大夫も受領の出来ぬ事を弁へてや後に有鱗軒と云 仮古名人上手あまたにて当り浄留りおほき中にて り声和佐太しよふず紋太にふし筆太大将住太村太ことしり 石五人の大夫いづれもおろかなかりし印し抜本の売れる事多し是 右五人の大夫いづれもおろかなかりし印し抜本の売れる事多し是 右五人の大夫いづれもおろかなかりし印し抜本の売れる事多し是 右五人の大夫いづれもおろかなかりし印し抜本の売れる事多し是 お行と云なから今に替る事なし

の斗にて段物稽古之衆は皆丸本にて夫ゆへに教ゆる人も程心成者に筆工と彫に気を付給へ昔寛延之頃迄は抜本といふ物なし景事道行もの大坂屋源八と両板也其後に多田屋理兵衛桧物町中程たゞ利徳よりの大坂屋源八と両板也其後に多田屋理兵衛桧物町中程たゞ利徳よりじめたるは浅草かや丁岩戸屋源八成しが今は其」(四+四*) 板行大坂比及の斗にて段物稽古之衆は皆丸本にないて独本屋の始は大坂屋秀八西宮新六五行本をは扨又御当地におひて抜本屋の始は大坂屋秀八西宮新六五行本をは

は洗べれ、 は洗本自由にて忠臣蔵も十一段目迄より取見取御勝手次第習ふ人もは 技本自由にて忠臣蔵も十一段目迄より取見取御勝手次第習ふ人も なくしゃれて来てまだ文句さへよふく〜に読んどしからんどし目く なくしゃれて来てまだ文句さへよふく〜に読んどしからんどし目く なくしゃれて来てまだ文句さへよふく〜に読んどしからんどし目く なんしもふ今日は是切と糸目のきれたたこ連中やかんでうでた赤 ッつら青く成り黒あせのかいた恥をも恥とせず千枚ばりの出語り素 のはなしもふ今日は是切と糸目のきれたたこ連中やかんでうでた赤 ッつら青く成り黒あせのかいた恥をも恥とせず千枚ばりの出語り素 人上下*見臺鼻付も高く留つた床の中東西く〜」(四十五4)

人とも松主には手を置て帰られし其叉昔は講釈夜浄留とも座料六銅人とも松主には手を置て帰られし其叉昔は講釈夜浄留とも座料六銅がなかとらば大学論語のひらがな本と正徳之頃より御免有て正本之奥書へならば大学論語のひらがな本と正徳之頃より御免有て正本之奥書へたかひょうたんかとぶら【〜」とも仏が今は万人にも過ぬべし雲に乗っめけば浄るりとこけおどしの仙人が今は万人にも過ぬべし雲に乗っめけば浄るりとこけおどしの仙人が今は万人にも過ぬべし雲に乗ったかひょうたんかとぶら【〜」となり、一個十五章】帰りし也前々は素人にては江がクツ (〜と笑ひしのんで」(四十五章)帰りし也前々は素人にては江がクツ (〜と笑ひしのんで」(四十五章)帰りし也前々は素人にては江がクツ (〜と笑ひしのんで」(四十五章)帰りし也前々は素人にては江がクツ (〜と笑ひしのんで」(四十五章)帰りしせ前々は素人にては江がクツ (〜と笑ひしのんで」(四十五章)帰りしては、此来之内両人出動せられて座斜三拾六銅宛尤此時の高料と申其頃大坂之福市谷三両がりたいといる。

夫に何ぞや今時は銘々家業も有つらんに職分にせらる大夫衆の手前

るヤボく (四+六オ)

連中さんイャそもじこそ今時の人気もしらぬ昔人団十郎も所作て当 も有ぞ江戸中素人浄留理とは他国へ聞立ても江戸の恥たしなみ成れ

江 戸 民花表中三住三十八夕 志出 権 香 古 き 竹 乙 竜 義樹 素 人 花飴油文上の文岩 亀山八 衆 5 9 不次 半手八 実 清 太 里 嘉 ろ T 水 Þ 久 同第 路可丸厳土真 閑 大 銕 江 十 八 文 考 迪 藤 下 橋 木 平 \equiv 線 昧 是は 座へ不出 尘 文 流右衛門 竹 か 九 太 亀郎 八 里 万忠八僑郎 姉 秀 賀 屋 糸 壺 道 長 小 弥 烟以久香 山 此外に数多あらんか近年の事は記さす 如松 手 E 太 匹 郎 郎 紙 間蝶 小 工 竹 主 元上三弦引 そばや 新肴丁 もぐさや ぞうりとも云 かづらし 芝ノ道具や よしずや 中橋左官 **汐留船宿** 元すきや丁 鼻紙袋や 八丁ぼり 元は大津の産 元は泉州に仕へ 田 入大夫 三の大夫 すり大夫 弦大夫 人名は和泉屋音次郎 利久大夫 織 加奈大夫 房 ひれ大夫 三根大夫 大大夫 名は水野清五 大夫 大夫 大夫 大 太夫 夫 肥前掾弟子 芝七まがり茶や 水戸文五郎の伜 ひら嘉の弟子 重大夫の弟子 新宿ニ 新内ぶしと成 紋大夫の弟子 住大夫の弟子 此むらや弟子 今の上手也後に筆大夫と名乗られし淨るり古 内匠弟子北さや丁 弥左衛門丁名次郎吉 房州の住人 兵介友大夫の弟子 親駒大夫代り勤られし 郎

大 夫 執 i 録

(四十六寸)

·	名	行年七十五歲
	法	阿耨院穆矣員足居士
妙音院声誉芝桝大姉 婦人の稀人芝 桝	夫	作者と成が中頃禅門になられ其後
; + -	太	京都にて杉本某と云
五月廿七日 文化十三子	Ø	享保九16十一月廿二日
樂地寺内 妙 延 寺	名	ナー
寺は 田 中 文 蔵	高	大阪中ヶ紅屋 64名
5 4	13	不聞院雄外孤雲居士 行年五十四歲
釈 道 学 信 士 的本生大夫		義 大夫
1 1	lÉ.	竹本政大夫ノ元祖
文化七年 郷生吉ノ座也	師	延享二世七月廿五日

」(四十七十)

净瑠璃产产判記集成 下

** * **鯉徳** 元は魚問屋江戸ッ子のはへ抜き素人浄留理の親か

| 大芝居で二の切迄語りしと有手取の親かた | 大芝居で二の切迄語りしと有手取の親かた | 大塚 上手といふに**啌**もない本八町堀此人に稽古した大

ずらへ 桃賀

是は大夫も恐れこんな浄るりが唐にもあろか本町

も金銀づくでもきく事ならぬおとめ筆御家流だけッまで大将軍のかげながらも聞たがる人はあれどの御大将近甚としてうごきなき仲介先生も桃賀九

しつかりした店も金銀づくでもきく事ならぬおとめ筆御家流だけ

がひにが虫喰右衛門もこたへかねて我しらず神田山おかしい事が箱屋さん堅地のさし物お武家様に東延り 巴升 ちゃりの名人其内でも夜鷹むけん自作の いもへ

は大鳥也

江戸ッ子の腹きものふと 掉」(四+セク)はし詰ょへ出るにおよばぬ浄留理も

からと打笑ふ

四町目に川内大夫と云老人なり古人となられし後舛大夫門人と成舛一 芝桝 *でふ幼少之頃稽古に取られしは宝暦四度の年其頃銀座

大夫は丹後掾と受領し舛の字は弟子おでんは譲り芝口と云地名を取大夫は丹後掾と受領し舛の字は弟子おでんは渡と満れて近こを尋ても原の花でんくへとあんばひよく次第に上達女浄留理の元祖三味線も関ならば三ノ切でも引かねぬ上手御殿がたは勿論どこへ行にも定駕男ならば三ノ切でも引かねぬ上手御殿がたは勿論どこへ行にも定駕明ならば三ノ切でも引かねぬ上手御殿がたは勿論どこへ行にも定駕明ならば三ノ切でも引かねぬ上手御殿がたは勿論とこへ行にも定駕明ならば三ノ切でも引かねぬ上手御殿がたは勿論とこへ行にも定駕明ならば三ノ切でも引かねるといるとがます。前代末間の芸者也又し御殿方へ召れ帰りは駒台にて戴もの送らる、前代末間の芸者也又し御殿方へ召れ帰りは駒台にて戴もの光を集て高野参り四こく中国はいふもさらなり大坂にても山吹の花を集て高野参り四こく中国はいふもさらなり大坂にても山吹の花を集て高野参り四こく中国はでで、一人といわれいで、大夫は丹後掾と受領し対の字は弟子がたは一様とといる。

有まじ柏莚の狂歌に」(四+八ヶ)

おしまる、時ちりてこそ世の中の花も華なり人も人なり

よミ人不知

におとった身の上じゃナアや男の身でも百三十里海山越て江戸 垣抱られ我等が身は主持同前女や男の身でも百三十里海山越て江戸 垣抱られ我等が身は主持同前女或時 *** 親父芝桝の宅 単参られ内の暮し方など見て申さるは浦山し

老ぬれば麒麟も土場の浄るりと下らぬ内にョッリ三重

弟浄留りは小音じゃが功者な物じゃむまいもんじや是は元なりの唐一 伊勢喜 雅名おみよ 明和の末桶町髪結之娘にて 清有衛門伊勢大夫門

極野判にて三味線の音羽の滝やねじめよし &に 晴里トナル(〒+丸*) 浜松屋の御代はざ、んざめでたきみよと浜美代の浄るり至一 浜美代是も明和末之頃南八町堀浜松 屋 と云 船 宿の 娘 也」

一 文匂元は西久保仕立屋の娘お梅とて住大夫弟子也天明のはじっ、文匂元は西久保仕立屋の娘お梅とて住大夫弟子也天明のはじった東入も有まじと御気之毒にそんし参らせ候と実入も有まじと御気之毒にそんし参らせば、 しも後室さまのおぼし召チャおそ巻の唐がらしひり、もよく夫より又 (〜江戸へ下り師匠老年に及びしゆへ介抱人旁田所よく時親と同道して大坂へ登られ住大夫之弟子なれば贔屓もよし請よく夫より師匠古人と成し後文匂寄世場へ出動は師匠の心にもどく町へ引移り師匠方人と成し後文匂を事とて祖大夫に住大夫を譲られ」では、 一 文匂元は西久保仕立屋の娘お梅とて住大夫弟子也天明のはじった。

老女に成られしならん ア東大夫の門人也師匠の名をもらひ八重太と改御屋敷様方其外歴々八重大夫の門人也師匠の名をもらひ八重太と改御屋敷様方其外歴々を敷も沢山にて評判よく弟子多クして殊之外繁昌なり元・ニ代号 機もはじめは八重太に稽古しける其後八重太き辺の御屋敷へ御奉公衆座敷も沢山にて評判よく弟子多クして殊之外繁昌なり元・ニ代号 へ乗座敷も沢山にて評判よく弟子多クして殊之外繁昌なり元・ニ代号 ながかして何を語られても皆よく聞そふで益々御意に入られ三味からない。

霞ヶ関辺の御屋敷へ飛っで行れしよろしく器量もよしと両方揃ひしとんびが鷹一つかみにして雲の上よろしく器量もよしと両方揃ひしとんびが鷹一つかみにして雲の上一 おすて是は宝暦末之頃筑波町時大夫の娘にて評判もJ(H+t)

ん親は目がなくても娘は手の有上手者下谷辺の御屋敷ェ上られし一 お十是は河内大夫 mam の弟子にて盲人の娘也浄留りも許ば

上達許ばんよく天明八年之頃三味線師匠万三郎納会に千本のすしや匠は驚の古兵者さて此おてつ稽古はじめは安永の末成らんか次第に一 万喜重 ౣ 木挽町采女ヶ原矢場の娘原鉄と云近来之上手成師

大当り矢場の娘当りました

やれかゞみ出して移して書とる文章 ろし」(A+1*) 給は、夜目遠目なり素性もおぼろおもひ付たるしらせ候ではか取らずよその事をば頭痛にやむと定めし上から見おらせ候ではか取らずよその事をば頭痛にやむと定めし上から見お

わいく)の男神るり斗野判に御さ候へとも右之婦人達格別の鞴物なれば此処江加ふもし差障も御座候は、取にたらぬと御用捨下さるへし御めん候へた

が立ぬよくは堪忍御万歳とは誠にめでたい宮戸さん今がよい隠居時故不残不許元より陰声音曲なれバ年よりのひや水も程をしらねば身一 大和掾を始とし其外名高き衆中多く下られしかど老年の大夫

イ」(宝十一之)

	1	7		1	<u> </u>	1
元 お 祖	亀や市の	溃 水 利	竹本	角 沢	小野	無 元
芝	郎左	五 兵	此大	検	. \$3	類 祖
桝	石衢村門	衛	夫	校	通	 稀 名
外無女に類儀	は猫三りの味	云今素	語ふひょ	引も三味	元い浄	
大	しかせ	グリの	しまい	は線	かる 理	人人
なも夫 しのの	一元わん	也 マ元 ト祖	元が、明祖、子祖、子祖、子子	元と云と云	祖ゝと	名
h \-)/t		後海	上	
よ 近 し 頃	文人	浄師とる匠い	文	後浄雲と云陸广治郎左	村	寄
て伊	はか か	る匠いりはふ	ド ス	浄雲と云	百大	
净 左	播成	ッ は か を り も	此代	衞 門	夫	の
る衛	广名	沈まの	義日	元語人	御始人	Ħ
理門	方 人	香方長	大義	り形に合	倫旨ア遺	見
をと	= 8	亭 へ 崎	を大	始合祖のせ	ア元道	台
語 い	有ら	か急滞	聞夫	近	竹	, p
6 ,	りん	ん飛留	た 後	松門	本	*.
るし	2 2	し 脚 之	し ニ	左	義大	しも万
ゝ蟻	な日	んに内	いが	衛門	夫	爱 其 物
寄鳳	ん本	して送	ふ 少	元作義	弘一義	に温に
勢 播	乃	て送と	心缘	祖り大	し流大	乗顕よせれら
場摩	芸	此来有	を音	名始夫 人し本	元語の人があり	しざず
な 大 ど 夫	能	師る其	作曲り長	豊	吉	芸る上
ど夫へと	を恐	な 春	播崎	竹	田田	者時はのハ又
も成	h	ら大人	广沈	駒	文	外会先其
折三	又	ばまの	弟 香	大夫	三郎	間ごハ上有
〈 味	右	播へ自	子 亭 喜 と	外い表	また人 時	じなりしきも
\ 完 線	礼	と語早	大い	なた調がれた。	が形の	かがか
線ハ	0	申ル々	夫 ふ	な子本	して手頃	ごれ とど
				しハと	ルナ 事 り	

出席有事とんだ茶釜がやかんの子じゃ物と人に笑いれ

風と小野川の咄しが出て若ひ衆はア、ねむい~~~~は面白狸乃はらづゝみホン~~はけふ此頃引込思案乃昔贔屓谷お笑ひもあらんなれども難波乃あしもよしとやら浄瑠理 上 戸 乃 方一 此愚筆老眼にじり書定めし落字仮名違ひ浄留理ぎらひ乃御方さま

豊右衛門写之

文政二卯神な月 東都住人 竹本屋

られしハ貞享始にて」(〒+119) 其後筑後掾となられ程経て正徳四 年節始りしより凡弐百年と記あれど元祖五郎兵へ先生義大夫と改名せ一 寛政九旦七月大坂にて出坂之音曲花毛ぬきとか申書に義大夫

を立られしハ貞享年中と承ル正徳四4年迄筑後掾芝居出勤迄凡三拾義大夫先生出生としより当年迄百七拾歳成べし但し義大夫と云高名六拾四歳にて古人と成し其年より文政二9とし迄が百六年となりぬ

流行におくれぬといふ其口が云たい見たい逢たいハ塩町の親父さん芝桝のばアさん

○是から跡に二三枚明地が有から何ぞ書たい記したい

年也

おらアよハぬと生酔乃癖せ行におくれぬといふ其口が

(以下省略)

浄瑠璃評判記集成 下

净瑠璃評判記集成 解 以

激素人浄瑠璃評判記上・中・下三冊

ある。縦三寸五分、横五寸三分五厘。 本修所蔵本によって補った。補った、部分は、上巻三上ォ~九上ゥ ない方のが題名か。但し題 写真)である。内題によれば「勉強素鑑」というのが題名か。但し題 写真)である。内題によれば「勉強素鑑」というのが題名か。但し題 写真)である。内題によれば「勉強素鑑」というのが題名か。但し題 写真)である。内題によれば「勉強素鑑」というのが題名か。但し題 写真)である。内題によれば「勉強素鑑」というのが題名か。但し題 のである。縦三寸五分、横五寸三分五厘。

「参考」横山 正「浄瑠璃評判記解説①」(国文学等四号)

江戸版 浄瑠璃秘伝抄 (一册) の抜書

を集めて序文を附けたのが江戸版の「秘伝抄」である。版は上方版第二編に入っている。それ以後再々版を重ねたが、この増補の部分じ版元で出した宝曆七年丑孟夏の「増補秘曲抄」で、「音曲叢書」二月で、作者は三東、板元は綿袋町の播磨屋佐兵衛である。次は同店。「浄瑠璃秘曲抄」は多くの版を重ねている。初版は寛延元年十山城少掾氏旧蔵。原装だが題簽は欠。天明二王寅年正月吉辰日の山城少掾氏旧蔵。原装だが題簽は欠。天明二王寅年正月吉辰日の

寸六分五厘。 それとは別に柱配や丁附のない増補が三丁ある。縦五寸二分、横三版元かどうかは不明である。柱記は「伝」、丁附は一―十二まで、版元かどうかは不明である。柱記は「伝」、丁附は一―十二まで、たに過ぎない。三丁の増補は中山清七の出版であるが、本文も同じ書」として井上播磨掾以下の三名人の名を掲げ、終の三丁を補筆し書』として井上播磨掾以下の三名人の名を掲げ、終の三丁を補筆し書」として非上播磨掾以下の三名人の名を掲げ、終の三丁を補筆し書い、「職工、「職工、」

江戸版(今昔)操年代記(一册)の抜書

天理図書館蔵の合冊本「義太夫評判記」を底本に使った。豊竹越 大理図書館蔵の合冊本「義太夫評判記」を底本に使った。豊竹越 大まうな素性の版元であった。 天理図書館蔵の合冊本「義太夫評判記」を底本に使った。豊竹越 大まうな素性の版元であった。 大ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と読ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて「あやつり」と表ませている。序文は「浪花其末葉」を流 を当てて、寛本は「東京」と書 を当てて「あった。豊竹越

〔参考〕 乗井 乙男「外題年鑑及び操年代記の異版」(『江戸文学彩

説

三弦人形方大評判行の物

棄

外題を兼ねて評判をしている。 改九巳年初夏、版元は吉野屋勘兵衛。太夫三味線人形遣いに限らず、森修蔵。縦一尺一寸二分、横一尺五寸五分の一枚刷り評判記。寛

義大夫執心録(一册)の抜書

写本

亭三馬の「田舎芝居忠臣蔵」その他の書抜きより成るが、ここではどの聞書きの部分、「見聞せし事筆にあらはす覚書」の経験談、式い、「浄瑠璃来由之事」「換人形の故事」「三味線来由之事」なへ」た「浄瑠璃来由之事」「持人形の故事」「三味線来由之事」な本書は三部から成り、「古老の物語られしを我等幼年の 時 聞 伝本書は三部から成り、「古老の物語られしを我等幼年の 時 聞 伝本書は三部から成り、「古老の物語られしを我等幼年の 時 聞 伝来書は三部から成り、「古老の他の書抜きより成るが、ここではたもの。石塚豊芥子の印記がある。墨附き五十六丁。その中、罫紙たもの。石塚豊芥子の印記がある。墨附き五十六丁。その中、罫紙にもの。石塚豊芥子の印記があるが、ここでは、大田の書があるが、ここでは、大田の書が書き、「一郎」が第二の一部では、「一郎」が第二の一部では、「一郎」が第二の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が第三の一部では、「一郎」が、「一郎」

経験談のみを掲載して他は省略した。

刊 覧

既

I

未刊淨瑠璃芸論集

演劇資料第一冊 (品切)

淨瑠璃本所在目錄 関西にある大学と図書館所蔵の浄瑠璃本を調査し、アイウエオ順に整理した所在目録。 関西の部

I

近松の研究と資料

近松研究の方法(森

修

犯罪浄瑠璃の展開(横山)正)

浄瑠璃段物集の序跋、および浄瑠璃本の序などにみられる芸論三十種を集成した。 A5・五十頁

演劇資料第二冊(品切)

B 5·五六頁

「津戸三郎」と「門出八島」(信多純一) 近松世話道行の物尽し(角田一郎)

演劇研究会論文集一(頒価百二十円

送料当方負担)

近松

元祿上方かぶきにおける道化、特に「あほう」について(丸西美千男) 江島其磧作「国姓爺明朝太平記」から見た「国性爺合戦」について(石川潤二郎) 近世初期演劇年表考証(佐古慶三)

杉森家系譜(甲、乙、丙) 同 親類書覚

IV

浄瑠璃評判記集成

上

同

願書

演劇資料第三冊

(頒価二百円

送料当方負担

A5・八二頁

「竹の春」 「新評判蛙歌」 「評判花相撲」

角

演劇資料第四冊(頒価二百円 送料当方負担)

晶厦 A5.九二頁

「評判登利合」

「三極志」

「難有矣」

「闇の礫」

V

浄瑠璃評判記集成

中

くむ芦」A5・九六頁

猿口轡」

「操曲浪花芦」

「浪のうねり鼎噂」

「操西東見台」

「音曲高名集」 「江戸三味無評判記」 「竹本不断桜」 「儀多百

七〇

界におくってより、ちょうど一年。上巻・中巻とあわせてお読み いただければ幸いです。 **浄瑠璃評判記集成** 下巻 やっとできあがりました。上巻を学

と銘うつには、あまりにもささやかなものですが、皆さんのお手 浄瑠璃評判記の翻刻は、以上三冊で一応完結します。「集成」

願っております。 もとに置かれまして、御研究に、何らかの意味で役立つように、

れぞれ勤めのある身の上で、勉強は心がけ次第でできるはずと思 ました。その歩みは、決して「至極順調」とはいえません。皆そ

会をもちつづけ、その成果を積み上げ積み上げして、今日に至り

私たちの研究会は、三十二年四月に発足して以来、月一回の例

らず何か出る会員もあり、また、しぼっても所詮ないものは出ぬ 私などのような頼もしげのない会員もあり、――まあ、そんな者 けです。特に、論文集でも作ろうとなると、知恵をしぼったら必 ランが若輩を啓蒙しカバーして、事実は、平等になっていないわ いながらも、時間に縛られ悪戦苦闘しています。 「仕事の平等な分担」をモットーにしていても、会員中のベテ

て、私たち会員は、古い近世演劇の道を進んでいこうと思いま 新しい年がやってきます。それにふさわしい新しい意欲をもっ

しょうか。

でも、居心地よく腰をすえていられるところが、この会の特色で

す。皆さんのご指導とご声援をお願いいたします。

津 近 諏 信 小 石

> 寺 ドナルド・キーン 尾 伸三郎

> > 丸

西美千

男

盛

森 向

Ш

とも 子

Ш

正 雄

(五十音順)

净瑠璃評判記集成 下 昭和三十五年十二月二十五日発行

演 劇

研 究 会

大阪市西淀川区姫里町一ノ三一

大阪 大阪刑 四 務所印刷 四 〇七七

印刷所

(山本とも子)